

伝丹比柴籬宮跡
上田町遺跡 発掘調査報告書

1991年3月

伝丹比柴籬宮跡・上田町遺跡発掘調査団

正 誤 表

| 頁・行 | 誤 | 正 |
|-------|----------------------------|---------------------------|
| 7・注 | 〔「日本の自然⑥」 | 〔「日本の自然」⑥ |
| 9・標題 | 〔「松原市遺跡発掘調査概要・昭和62年度」より転載〕 | 〔「松原市道路発掘調査概要」昭和62年度より転載〕 |
| 53・10 | 岩波書店「日本文学体系67・日本書紀・上」より | 「日本書紀」上・日本古典文学体系67 岩波書店より |
| 53・15 | 柴籬神社が地として挙げられている。 | 柴籬神社が故地として定着している。 |
| 30・標題 | 第13図 S I 01井戸上遺構 | 第13図・S E 01井戸状遺構 |
| 53・25 | ことを確認している。) | ことを確認している)。 |

伝丹比柴籬宮跡 上田町遺跡 発掘調査報告書



1991年3月

伝丹比柴籬宮跡・上田町遺跡発掘調査団



調査地周辺航空写真（1991年1月　写眞エンジニアリング株式会社撮影：提供）



第6層面検出遺構全景（1990年6月21日撮影）



上：足の指先まで残るヒトの足跡(G-5区)

中：SD01溝状遺構遺物出土状況

下：自然河川I検出状況(南北トレンチ内)

例　　言

1. 本書は、大阪府松原市上町4丁目649-1, 652-3, 665-2, 666-2, 666-4, 667-4地内において実施した事務所付共同住宅建設に伴う発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、平成2年3月11日から同年8月10日まで実施し、事業主である株式会社富士住建の委託によって、杉山信二が担当した。調査團の組織編成は以下のとおりである。

- 調査團長　杉山　信二（日本考古学协会会员）
調査主任　畠　美樹徳
調査員　大朝　利和・西原　雄大
調査補助員　山本　利之介・水口　義一・白井　義広・寺山　薰・畠　哲史
　　畠　聰明・畠　京子・川上　了司・吉川　卓巳
作業員　安西工業株式会社美原営業所（尾崎利夫・藤井晴夫・丸本淳司・三好
　　孝行・桜田洋・鳥居峰明・山谷芳衛・山本武史・出口和孝・ほか）
3. 検出遺構の写真撮影は畠と西原が担当し、出土遺物の写真撮影は畠が担当した。
4. 整理作業は滋賀県草津市の畠の自宅で行い、平成2年8月13日から平成3年3月25日まで畠・西原が主としてこれにあたり、大朝が参加協力した。整理分担は畠の指導のもとに、出土遺物の復原・実測・製図を西原・畠・京子が行い、遺構図の製図は畠が行った。
5. 本報告書の執筆分担は以下のとおりである。なお、杉山信二が統括した。
第1章1：大朝　利和　2：足立　俊彦（松原市教育委員会）
第2章・第3章・第4章1・2・第5章1・3：畠　美樹徳
第4章2-3・第5章1-2：西原　雄大
6. 本書に使用した地図は、松原市発行の松原市都市基本計画図(5)1:2,500を複製して調整したものである。
7. 遺構図で使用した方位・座標は新平面直角座標系(VI)による。
8. 標高は、T P（東京湾平均海面高度）を用いた。
9. 各土壤の色名は、「新版　標準土色帖」（1976年9月、新日本色研事業発行）に準じた。
10. 発掘調査実施にあたって以下の諸機関・団体・個人の御協力と御助言を賜った。記して感謝の意を表す次第である。（敬称略・五十音順）
安西工業株式会社・株式会社富士住建・株式会社山形工務店・関西電力株式会社・三恒
商事株式会社・写測エンジニアリング株式会社
足立　俊彦・岩本　光博・池野　善啓・榎木　充・榎　康史・柴山　修治・澤　洋一・
砂田　昌利・高山佐依子・竹原　一彦・中井　功一・畠　セツ・原　秀植・藤井　眞正
村井　勝・森岡　秀人・森下　衛・山形　文一・山口　博・古間　博之・吉村　正親

目 次

口 紋

例 言

第1章 調査の動機

| | |
|-------------------------|---|
| 1. 発掘調査にいたる経過..... | 1 |
| 2. 埋蔵文化財予備調査結果について..... | 2 |

第2章 調査の位置と環境

| | |
|------------------|---|
| 1. 地理・歴史的環境..... | 6 |
| 2. 調査の位置と環境..... | 8 |

第3章 発掘調査の経過

| | |
|---------------|----|
| 1. 調査の目的..... | 10 |
| 2. 調査の方法..... | 10 |
| 3. 調査の経過..... | 10 |
| 調査日誌(抄)..... | 13 |

第4章 発掘調査の成果

| | |
|--------------|----|
| 1. 層 序..... | 20 |
| 2. 出土遺構..... | 20 |
| 3. 出土遺物..... | 31 |
| 出土遺物観察表..... | 45 |

第5章 考 察

| | |
|--------------------|----|
| 1. 出土遺構について..... | 51 |
| 2. 出土遺物について..... | 52 |
| 3. 丹比柴籬宮跡について..... | 53 |

図版目次

- 図版1 遺跡 調査地周辺航空写真
- 図版2 遺跡 上：調査着手前の状況（南から）
下：同（北から）
- 図版3 遺跡 上：第3層（中・近世耕土層）面全景（南から）
下：同（北から）
- 図版4 遺跡 上：第4層（中世床上＝“足跡群”検出）面全景（南から）
下：同（北から）
- 図版5 遺跡 上：“足跡群・カラスキ痕”検出状況（E-8区）
下：“足跡群（ウシ・ヒト）”検出状況（G-5区）
- 図版6 遺跡 上：“足跡群”完掘状況（G-5区）
下：標準サンプルとした“ヒト”的足跡（G-5区）
- 図版7 遺跡 “足跡群”完掘状況
G～H間（上：3～5区 中：5～7区 下：6～8区）
- 図版8 遺跡 第6層面全景（6月21日 写測エンジニアリング株式会社撮影）
- 図版9 遺跡 上：SK01土壤・SD01溝状造構全景（6月21日 同社撮影）
下：SK02土壤全景（同）
- 図版10 遺跡 上：SD05溝状造構全景（南から）
下：同（遺物出土状況）
- 図版11 遺跡 上：SK01土壤遺物出土状況
下：排水トレンチ内遺物（遺物実測図番号2）出土状況・I-10区
- 図版12 遺跡 SP01ピット内遺物出土状況（遺物実測図番号28～32）
上：検出面 中：土師器甕遺存状況 下：ピット最深部分
- 図版13 遺跡 上：6×6 抻張区 SD10溝状造構検出状況（東から）
下：SD10溝状造構完掘状況（東から）
- 図版14 遺跡 上：6×6 抻張区深掘状況（西から）
下：6×6 抻張区東壁面第13層遺物（弥生土器・植物遺体）出土状況
- 図版15 遺跡 上：SE01井戸状造構断ち割り状況
下：Fライン断ち割りトレンチ（北から）
- 図版16 遺物 17.鉢 32.甕 2.甕
- 図版17 遺物 25.器台 4.甕 21.器台 15.小型丸底甕
7.环蓋（須恵器） 13.羽釜（瓦器） 11.青磁碗
- 図版18 遺物 5.叩き石（？） 37.砥石（？） 39.石鎌未製品 38.石鎌 33.把手（弥生土器）
18.小形仿製鏡 銭貨「神功開寶」 植物遺体（種子・木の葉）

挿図・表・写真目次

| | | |
|------|--------------------------|-----------|
| 第1図 | 松原市の位置 | 中表紙 |
| 第2図 | 予備調査トレンチ位置図 | 3 |
| 第3図 | 予備調査トレンチ断面柱状図 | 4 |
| 第4図 | 大阪平野の古地理(河内湖Iの時代) | 7 |
| 第5図 | 松原市周辺遺跡図 | 9 |
| 第6図 | 調査位置図 | 12 |
| 第7図 | 調査地割り付け図 | 19 |
| 第8図 | 各トレンチ・6×6拡張区断面実測図 | (付図と共に挿入) |
| 第9図 | “足跡群”断面図(南北トレンチ東壁) | 23 |
| 第10図 | “足跡群”運動方向推定図 | 25 |
| 第11図 | SK01土壌・SD01溝状造構実測図 | 27 |
| 第12図 | SD05溝状造構(上)・SK02土壌(下)実測図 | 29 |
| 第13図 | SE01井戸状造構断面図 | 30 |
| 第14図 | SP01~03ピット実測図 | 31 |
| 第15図 | トレンチと6×6拡張区から推定した自然河川 | 32 |
| 第16図 | 出土遺物実測図1 | 34 |
| 第17図 | 出土遺物実測図2 | 35 |
| 第18図 | 出土遺物実測図3 | 38 |
| 第19図 | 出土遺物実測図4 | 39 |
| 第20図 | 出土遺物実測図5 | 41 |
| 第21図 | 出土遺物実測図6 | 42 |
| 第22図 | 出土遺物実測図7 | 43 |
| 第23図 | 出土遺物実測図8 | 44 |
| 第24図 | 『神功開寶』拓影(実大) | 50 |
| 第25図 | 調査地周辺「字切図」 | 54 |
| 付図1 | “足跡群”実測図 | |
| 付図2 | 第6層面検出造構実測図 | |
| 表 | 出土遺物観察表 | 45 |
| 写真1 | 調査地から東をのぞむ | 1 |
| 写真2 | 予備調査実施状況 | 5 |

第1章 調査の動機

1. 発掘調査にいたる経過

大阪府松原市は大阪市の近郊都市として、近年急速に開発が進められている地域のひとつである。農地の宅地化、住宅地の再開発と高層化、当然これらの事業は文化財、特に埋蔵文化財の破壊という問題を生み出している。

本調査の対象地である「松原市上田4丁目649-1 他5筆」は、近畿日本鉄道南北大阪線「河内松原駅」から西へ歩いて2~3分という交通の便のよい地点にある。もとは水田であり、今回の発掘調査でわかったことであるが、関西電力の高圧電線用鉄塔が立っていたようである。それが後に一部が宅地となり、それも取り壊されて全面に1m強の盛土が施され、発掘調査前までは駐車場として使用されていた。

この土地の所有者株式会社山形工務店と株式会社富士住建との間で売買契約が成立し、富士住建が当地に事務所付共同住宅を建設するために松原市に届け出たが、松原市教育委員会では、当地が「伝丹比柴籬宮跡」と「上田町遺跡」の範囲内に存在するため、技師足立俊彦氏によって1988年10月24日、トレンチによる試掘を実施した。その結果、遺構・遺物の存在が確認され、本格的な発掘調査が必要と判断された。しかし、松原市教育委員会では調査件数がここ数年激増しており、本調査はかなり遅れることが予想された。そのため、事業主株式会社富士住建は1989年7月、人を介して日本考古学協会会員である杉山信三に調査を依頼した。杉山はこれを受けて自らを團長とする「伝丹比柴籬宮跡・上田町遺跡発掘調査団」を結成した。

その後数箇月にわたって、調査団と松原市教育委員会および富士住建の三者あるいは二者によって協議を重ね、ようやく1990年2月13日「埋蔵文化財調査に関する協定書」に三者と山形工務店が調印し、同年3月から発掘調査が実施されることになった。



写真1 調査現場より東をのぞむ（左の道路は府道 堺大和高田線）

2. 埋蔵文化財予備調査結果について

遺跡名稱………月比柴籬宮跡・上田町遺跡

調査場所………松原市上田4-649-1地5筆

調査目的………事務所付共同住宅建設に伴う埋蔵文化財状況確認のため

調査日………昭和63年10月24日

対象面積………1814.44m²

調査面積………1×25.5m=25.5m²

調査は、幅1mのトレンチを敷地の東寄りに南北方向に設定し、延長25.5mに渡って、バックホーによって掘削し、人力による精査を行ったのち断面観察した。

層序は上層より、盛土・①耕土・②灰黃褐色粘質土(床土)・③灰色粘質土・④暗黃褐色粘質土・⑤暗褐灰色粘質土・⑥暗黃橙色粘質土・⑦褐灰色粘質土・⑧明黃褐色粘質土(地山)の順に堆積する。

又地層は、調査トレンチでは、ほぼ平行に堆積しており、地形は南から北へ向って緩やかな傾斜を示しているが、大きな変化等は特に見られない。

遺物は、第5層暗褐灰色粘質土から採取され、第V様式の弥生土器片、及び庄内式土器片等が出土している。

遺構は第6層暗黃橙色粘質土を掘り込む、土坑、ピット、溝等が検出された。遺構の埋土はいづれも黒色粘質土で、差異は認められない。遺構からは土器器の細片が出土したが時期を特定することは出来ない。しかし直上の包含層や、周辺の調査の状況から、古墳時代前期から中期にかけてのものと考えられる。

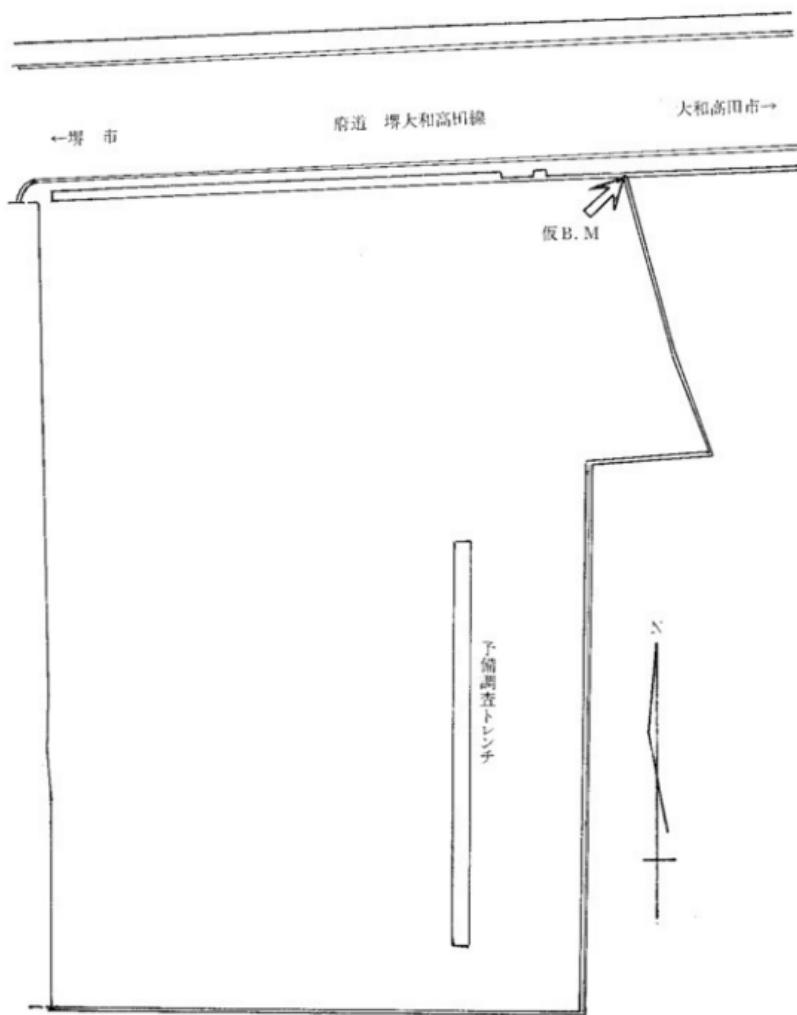
今回の調査では、遺構面は古墳時代の一層しか確認することが出来なかったが、本調査においては、上層の第3層灰色粘質土及び第4層暗黃褐色粘質土面における古代から中世にかけての遺構の確認及び下層の第7層褐灰色粘質土・第8層明黃褐色粘質土面における古墳時代以前の遺構の確認に留意する必要がある。

注) この項は、平成元年8月17日付で松原市教育委員会の足立俊彦氏から贈呈された上田町遺跡に関する資料のうち、本調査地点の予備調査結果である。

この時点では本調査に関する協議は白紙の状態であり、調査を受託することすら未定であった。

そこで、本調査開始までの正確な状況を把握するにはこの資料を原文通り掲載しておくのが調査担当者として最善の方法であろうと判断したのである。

なお、原文は手書きであるが、それを活字に改め、付図・写真とともに標題を付したことを御了承願いたい。



第2図 予備調査トレンチ位置図 (松原市教育委員会の提供資料に加筆)

2

北漢

(S)

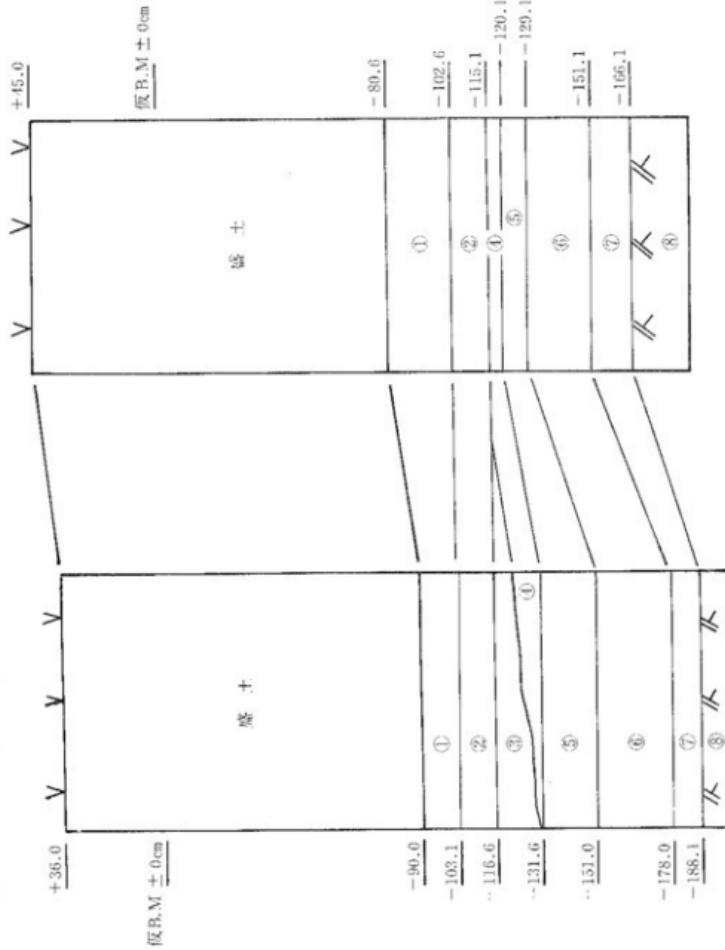




写真2　予備調査実施状況（松原市教育委員会提供）

第2章 調査の位置と環境

1. 地理・歴史的環境

松原市は大阪府のはば中心部にあり、市域は北を大阪市の南を流れる大和川を境として東は藤井寺市・羽曳野市、西は堺市、南は南河内郡美原町に囲まれた海拔40~10mの緩傾斜の平地にあって、地形上では、狹山池を扇頂にして狹山古扇状地の中央部から末端付近に位置する。

昭和30(1955)年2月、中河内郡松原町・天美町・布忍村・三宅村・恵我村の2町3村が合併、面積16.58km²、大阪府では21番目の都市として誕生した。

かつては大阪市の近郊農業地帯として発達したが、大正12(1923)年に開通した大阪電気軌道（現在の近畿日本鉄道南大阪線）の開通を機に次第に市街地化し、近年の道路整備と自動車道の開通によって、大阪・堺両市の住宅と工場の進出による急激な都市化が進行している。

松原市の地理は大阪平野の発達史を抜きにして論じられず、その研究成果は梶山彦太郎・市原実両氏の労作が「地質学論集7」に発表されている。ここでは一般向けの概説書として1986年に青木書店から刊行された『大阪平野のおいたち』とともに、1987年に平凡社から出版された『日本の自然』第6巻「日本の平野」から該当する部分を参考資料とした。

両氏は大阪平野に分布する遺跡や工事現場から試料を採集し、それをもとに大阪平野が海城から淡水城へと変化し、さらにその淡水城が陸地に変化する古地理を復原し、「河内湾Iの時代」（約7000~6000年前）「河内湾IIの時代」（約5000~4000年前）「河内潟の時代」（約3000~2000年前）「河内湖Iの時代」（約1800~1600年前）「河内湖IIの時代」（5世紀頃）の5期に分類している。古地理の復原は、より多くのデーターによって修正されていくであろうが、ここでは本調査の対象となった上田町遺跡が存在したと考えられる「河内湖Iの時代」として弥生時代末から古墳時代初期の主要遺跡を加えた平凡社の図に、若干加筆したものを第4図として掲載した。この図から、現在の上町台地や羽曳野丘陵の河川の流域に主要な遺跡が分布している様子を知ることができる。

松原市は『記・紀』に記された反正天皇の丹比柴庵宮が営まれた地であり、それを柴庵神社にあてる説が普及している。また、『日本書紀』によれば依羅屯倉が設置されたことが記され、これも地名から三宅町の三宅遺跡を推定地としているが、いずれも伝承をもとに推定したもので、それを確定するにはいたらない。

この地が早くから開拓され、人々が定住していたことは、近年の調査によって確認されている。また、現在でこそ埋め立てられて少なくなったものの、古い地図をみると、河内地方に分布する多くの溜池は、条里型地割とともに先人の耕地開拓に対する努力がうかがえる歴史遺産である。

交通面では古代から“丹比道”“大津道”が、難波と大和飛鳥を結ぶ道路として利用され、これは現在の竹ノ内街道と長尾街道に比定されている。また、『日本書紀』には、こ



凡　例

- | | |
|--------------------|------------------------------|
| ■ 海域 (大阪湾) | ○ 弥生時代後期～古墳時代前期のおもな遺跡 |
| ■ 淡水域 (河内湖) | ● おもな前期古墳 |

第4図　大阪平野の古地理【河内湖Ⅰの時代】

(約1,800～1,600年前：弥生時代後期～古墳時代前期)

〔『日本の自然⑥2市原実＋水収支グループ+応用地質研究会編「日本の平野」1987年
平凡社刊のものに筆者が加筆・転載した〕

れと直交する形で難波京に通じる“難波大道”が設置されたことが記され、近年の発掘調査によってその一部が確認されている。

2. 調査の位置と環境

調査地は、府道堺大和高田線に接する南側、近鉄河内松原駅から西へ約400mの地点に位置し、住宅を挟んだ南側には松原中学校・生野高校・松原小学校がある。

巨視的には、羽曳野丘陵から流れる東除川と西除川の間の沖積段丘上に立地し、標高約20mの南高北低の地形であり、東に生駒・金剛山系をのぞみ、西は大阪湾へと通じている。

上田町遺跡は1962年10月に発見され、1964年8月、原口正三氏が松原郵便局新築工事に伴って発掘調査を行い、3層の遺物包含層出土の土器群に上田町I～III式の名称を冠した標識として学史上に名を残した。この調査を契機としてこれ以後大阪府教育委員会と松原市教育委員会による調査がすすめられ、弥生時代後期から中世にわたる遺跡であることが明らかとなった。遺跡の範囲は上田町一帯とされるが、その一部は柴籬宮跡伝承地とされる地域とも重複し柴籬神社の存在と小字名によって、むしろこのほうが一般には知られているが、数次の発掘調査が実施されているにもかかわらずそれを証明する構造・遺物は出土していない。

周辺の遺跡は大阪府教育委員会が発行した「丹比柴籬宮跡発掘調査概要・I」「上田町遺跡発掘調査概要」によれば、旧石器時代の遺跡として大和川今池遺跡と大塚遺跡を挙げている。縄文時代には新大和川の北にある長原遺跡・八尾南遺跡などの著名な遺跡とともに松原市では、府立生野高校地内で晩期の遺跡が確認されている。続く弥生時代から遺跡数は増加し、新大和川を挟んで瓜破遺跡・瓜破北遺跡・大和川今池遺跡などとともに市内では河合遺跡・高見の里遺跡・上田町遺跡の存在が確認されている。

古墳時代では北に長原古墳群、西に百舌古墳群、東に古市古墳群という有名な古墳群の間にあって、雄略天皇陵に比定されている河内大塚古墳（藤井寺市にまたがる）、山ノ内古墳・一津屋古墳などとともに、種野ヶ池窓の存在は、6世紀に須恵器がこの地で生産されていたことを証明する遺跡である。上田町遺跡もこの時期の集落遺跡として扱われているし、丹比柴籬宮跡もこの時代に含まれる。

その後歴史時代以後には大津道・丹比道・難波大道などの道路跡・集落跡・寺院跡・中世城館跡など、各時代にわたって多くの遺跡が分布している。

主要遺跡名称（本文にあげたものだけを記した。番号は第5図による）

| | | | |
|----------------|-------------------|-----------------|----------------|
| 丹比柴籬宮跡〔2〕 | 上 宅 遺 跡〔8〕 | 高見の里遺跡〔16〕 | 長原遺跡〔38〕 |
| 種野ヶ池窓跡〔3〕 | 山 ノ 内 古 墳 跡〔9〕 | 大 塚 遺 跡〔18〕 | |
| 上 田 町 遺 跡〔4〕 | 大 津 道(長尾街道)〔11〕 | 一 津 屋 古 墳 跡〔20〕 | |
| 河 内 大 塚 古 墳〔5〕 | 大 和 川 今 池 遺 跡〔12〕 | 瓜 破 遺 跡〔28〕 | |
| 河 合 遺 跡〔7〕 | 丹 比 道(竹之内街道)〔15〕 | 難 波 大 道〔30〕 | 八 尾 南 遺 跡〔132〕 |



第5図 松原市周辺道路（『松原市道路発掘調査概要・昭和62年度』より転載）

第3章 発掘調査の経過

発掘調査を開始するにあたって、事前に関係者が協議を重ね、調査団側から種々の条件を呈示したのち関係書類を松原市教育委員会へ持参し、調査受託と調査期間を平成2年3月1日から実働120日間とすることを通知し、関係資料の提供と指導・協力を求め、富士住建側には調査現場の環境保全と調査体制の諸準備を依頼したが、実際には3月11日に現場に入ったものの諸条件の整備の遅れと周辺住民の苦情が市役所に寄せられたことから防塵施設の設置工事を施したため、実質的には3月20日に調査を開始した。

1. 調査の目的

第1点は上田町遺跡に関して、原口正三氏が調査して上田町1～田式の名称が与えられた土器包含層の確認と、その他の遺構・遺物の確認である。

第2点は伝丹比柴館宮跡について、近年の調査された大阪市の難波宮跡と奈良県桜井市所在の灯明田遺跡から5世紀のものとみられる建物跡群が出土し、仁徳天皇の高津宮と雄略天皇の朝倉宮跡かと騒がれたが、両天皇の中間に位置する反正天皇の宮を探る一つの資料として、調査地でも類似の遺構が確認できればと期待した。

2. 調査の方法

市役所入口に設置された大阪府水準点(18.93m)から現場入口の歩道上に仮B.Mを設け、調査地全体を3m方眼で磁針で割り付け、西から東へアルファベットを、北から南へ数字を冠し、調査範囲をL字形に設定した。その西端と南端に断面観察・排水処理兼用の幅約1mのトレーニングを設けて「南北トレーニング」「東西トレーニング」とよぶことにした。

予備調査結果によって、盛土が1m以上の堆積であることを懸念して、安全対策上残土は全て外部へ搬出し、周囲の掘形は、できる限り緩い勾配をもたせ、周辺住民への配慮から掘削位置を計画よりやや内側に避けることにした。

3. 調査の経過

予備調査結果から第3層が中・近世の耕土層であることがわかつていたので、不要な上層の土を機械力によって除去、第3層面から精査し、これと並行してトレーニングを掘削する方法をとった。この作業過程で地主でさえ知らなかつた関西電力の高压線鉄塔基礎がそのまま埋められた上に住宅が建てられていたことが判明し、同社に設置・撤去年代と工事内容を照会したところ、基礎部分が埋設面から3m下であることを確認したことから、コンクリート基礎の撤去を断念した。鉄塔だけでなく、周囲の電柱基礎も数箇所で検出し、調査区西側の部分が予想以上に搅乱されていることを確認した。

第3層面に遺構が遺存していないのを確認したのち、第4層面の精査を開始した時点で全域で複雑に重複した偶蹄目とヒトの足跡のか、不定形な溝状遺構も検出した。それぞ

れの埋土中に土師器・瓦器・黒色土器の細片を含んでいることから、これらの遺構を中世のものと判断し、溝状遺構をカラスキ痕とみれば、偶跡日はウシであろうと考えた。

遺構の遺存状況からこの層が中世の水田床土面にあたると解釈するのが妥当ではないかという判断によって、検出した足跡を総称して“足跡群”とよぶことにした。

第4層面の遺構検出作業を終え、精査へ移る過程で、たびたび集中豪雨に見舞われ、検出遺構の損傷を憂慮したが、それらはシートで覆い、大崩壊したトレントが隣接家屋に被害を与える前に、安全対策面でもその修復作業を優先すべきと判断し、調査と平行してトレントの船をやや拡張して補修と補強作業を行った。

“足跡群”は撮影・実測終了後、G・Hライン間を残して完掘した。ここでは、水田が2段の段差をもつことを確認し、(上田水田)(下田水田)と仮称した。精査中、G-5区から5本の指が残るヒトの足跡が、G-4区では腐食した神功開寶が1枚出土した。

“足跡群”検出作業完了後、撮影・実測作業を終えた時点で第6層面まで掘り下げ、航空写真はこの面で検出した遺構を対象とすることを調査会議で決定した。

第6層面では土壤・溝状遺構・ピットとともに無数の小穴を検出した。しかし、どの穴も規則性は認められず、直撒きによる稲株の痕跡の可能性も考えたが、長靴状の穴をトレント断面で確認したことから、折れ曲がったものについては現場の地質条件と周辺遺跡の調査結果から“カニ穴”ではないかと考えた。

航空写真は周辺住民の苦情と学校の授業を配慮してバルーンによる撮影を6月21日に実施した。

撮影終了後、関係者が集って中間報告を行い調査終了の時期を協議したが、市教委から北側の廃土処理場として未掘になっている部分と入口東側に建設される機械室予定部分の調査実施を指導され、調査団としては、最初から安全対策と周辺の環境への配慮によって指摘部分の掘削は控えていたと説明したが、提出された富士住建の建築申請部分の完掘を要請して頭歩せず、調査団長の判断を仰いでこれを了承することにした。

改めて機械力で拡張し、周間に残土を置き、侵入者対策を施した。拡張調査区には「北側拡張区」「6×6拡張区」の名称を付けた。

結果として、北側拡張区では“足跡群”的拡張を確認し、6×6拡張区ではその下層から自然河川の跡を検出した。

自然河川跡からは植物遺体(流木・種子等)とともに本調査で初めて弥生土器片を検出したが、これは単に調査地内の高低差だけでなく、地形・地層の様相も異なることを物語っていた。それを確認するために、調査完了間際の時点をFラインに沿って断ち割りトレントを設定し、他のトレントと検討した結果、先に検出した自然河川跡とともに、それ以前の自然河川跡2本を確認し、合計3本の自然河川が時期を異にして、南東から北西に流れていたことが判明した。

これらの調査成果を得てすべての調査を完了したのは8月10日である。同日松原警察署へ「遺物発見届」を提出し、市教委へ終了の挨拶をしたあとで撤収作業を行い12日、滋賀県草津市の畠宅へ搬入し、13日から整理と報告書作成作業を開始した。



第6図 調査位置図（斜線部分・縮尺1/2500）

調査日誌（抄）

3月11日㈬ 晴れ

調査用資材・機材搬入。復・山本・水口の3名が現場に待機。本日から宿泊体制に入る。

3月12日㈭ 露雨時々晴れ

事務所周囲の仮設工事。午後、富士住建の担当者岩本氏、布岡・電化製品持参。発掘調査対象地域設定。

3月13日㈮ 晴れ

現場内の環境整備(除草・ゴミ処理)。掘削開始時期を19日目に決定し、岩本氏に作業員・警備員・機械等の手配を依頼する。

午後、山形工務店の担当者池野氏より、明日発掘調査作業の分担につき3音で協議したいとの連絡あり。

入口の看板表示にクレームがつき、撤収する。

3月14日㈯ 晴れ後曇り

施設兼事務所の電気工事完了。除草作業完了。午前岩本・池野両氏の話し合いにより、発掘調査作業分担を決定する。

夕方、松原市教育委員会社会教育課長視察。周辺住民の苦情に対して善処を要望される。

3月15日㈰ 雨後曇り一時晴れ

現状での平板測量。市役所入口に大阪府水準点の存在を確認し、地図に記載された数値(18.93m)を信頼したが、念の為、市教委に確認を依頼する。

3月16日㈪ 晴れ

発掘調査現場入り口歩道上に仮B.M設定。21.867mの数値を得たが、再確認の必要あり。

午後、㈱安西工業営原営業所長砂田氏来訪。作業計画と工程説明。

3月17日㈫ 晴れ

防護ネット工事開始。各資材・ベルコン入荷。池野氏より掘削作業は20日から開始したいとの連絡あり。安西工業へ作業開始日延期を連絡。

3月18日㈬ 曇り時々晴れ・強風

室内作業(平版図)レース。防塵工事を完了。

3月19日㈭ 晴れ

駐車場時代のロープ撤去・除草・整地作業。写真撮影用ヤグラ設置。現場内環境整備。原状撮影。調査区割り付け。

3月20日㈮ 晴れ

原状撮影。調査区南端から掘削開始。断面観察用トレンチ同時に掘削。盛土(約120cm)除去。簡壁に土止めを施す。

3月21日㈯ 晴れ

東西トレンチの層序は大別して盛土・旧耕土・植土茶褐色粘質土・黄灰色粘質砂・暗黃灰色微砂以下微

砂層の推積で、遺物はトレンチ東端の第4層中に集中して含まれる。この観察結果から、上の3層は機械での除去が可能と判断した。調査区西端に南北方向のトレンチを設定し、雨水・污水处理の側面も設けた。

3月22日㈰ 曇れ一時晴り

掘削完了部分の平面処理。複数部分が多い。南北トレンチ中央の東壁に土壤状の掘形(最大幅約150cm・深さ約40cm)検出。土師器片の包含を確認。

3月23日㈪ 曇れ

ベルコン設定。平面精査。残土処理。

3月24日㈫ 曇り後晴

トレンチ壁面精査。

3月25日㈬ 曇り

雨水処理。トレンチ壁面崩壊箇所点検処理。

3月26日㈭ 晴れ

第2層【明治灰色(5GB7/1)粘質土】=近世~現代の水耕灰土:除去作業(この時点で盛土を除き、旧耕土層を第1層とする)。

3月27日㈮ 晴れ

コンクリート基礎4個所で検出(径約2.5mの隙形を作り)。隣接部分で本柱が直存する不定形の掘影を検出したことから、高圧線鉄塔の基礎ではないかという大朝調査員の意見を検証すべく、関西電力株式会社松原変電所に問い合わせせる。その結果、1963年設置、1982年撤去、2m角の基礎柱・底面G.L.-3100mmという回答から返答があり、基礎撤去作業は無理と判断して、調査完了まで残すこととした。

3月28日㈯ 曇り後晴

機械掘削完了。平面精査。室内作業(遺物洗浄)。

3月29日㈰ 曇り一時雨

トレンチ壁面崩壊箇所に、杭・コンバネで土止めする。調査区割り付け・杭打ち。

3月30日㈪ 曇り

平板測量。トレンチ崩壊箇所修復。平面精査。写真撮影。

3月31日㈫ 曇り後晴

写真撮影。(相思な杭に悩まされつつ)全域割り付け完了。

4月1日㈬ 曇り

雨水排水処理作業。室内作業(遺物洗浄)。

4月2日㈭ 晴れ

トレンチ精査。柱を残して南から第4層【オリーブ褐色(2.5V 4/4)粘質土】上面まで掘り下げ、人・偶蹄目の足跡検出。その広がりを追う。

4月3日㈮ 晴れ後曇り

水耕灰土の足跡群精査。東西トレンチ北壁を削り付け壁に沿って修正し、土止め処理を行う。

- 4月4日(木) 晴
室内整理(図面整理・遺物洗濯)。
- 4月5日(金) 曇り時々晴れ、一時雨
雨水排水処理。トレント塗面精査。足跡群検出作業
倒壊振り下げ作業中、I・10区の第5層で土師器甕出土。
但し朝那のみで上下位露溝状造構確認。
- 4月6日(土) 晴
南北トレント北端をコンパネ・杭で止止めし、崩壊
流入を防止する。土作成。写真撮影(出土状況)。
- 杉川団長・藤井正直(人手前女子大学教授)氏・松原
市教育委員会職員2名視察。今後の調査方針について
検討する。
- (昨日検出した土師器甕は11種類が下位で埋没して
いることを確認するが、作業員の不注意で踏み潰され
てしまった。尾崎氏に、全員を駆けて注意させる)。
- 4月7日(日) 曇り後雨
写真撮影。ペルコン設定。5ライン以北・Fライン
以外で足跡群を残して実測。それ以外は遺存状況に必
要じて実測後、Fラインに沿った畦を残し、第5層[灰
黄褐色(10YR 4/2)]まで振り下げることにした。午後、
降雨により作業中止。室内作業に移る。
- 4月8日(月) 雨後曇り
排水処理作業。西・南壁面大崩壊。ポンプ埋没し、
取り上げ不可。畦を切って水をトレントへ流す。
- 4月9日(火) 晴れ
作業開始前のミーティングで、現場内の諸注意事項
徹底。今後の作業工程説明。
- シート敷き・洗濯。トレント内に埋没したポンプを
引き上げ、修理。平面精査。排水溝設定。足跡群実測
- 4月10日(水) 曇り後晴れ
Dライン以内、第5層まで上面振り下げ、土堆(南
北トレント復原時に、東壁面で確認していたもの)推
測確認。トレント内崩壊土排出作業。バックホー搬入
- 4月11日(木) 晴れ
ダム搬入。残土処理。トレント内崩壊土排除。壁
面精査。東西トレント雨蓋断面実測。G4区水田表面
撮影。平面実測続行。
- 4月12日(金) 晴れ
現場開始から1ヶ月経過。連日乾燥注意報が発令さ
れる。造構面がシルト層を基盤としているので、ヒビ
割れ防止策としてシート養生しながら調査進行。同時に
に大泊に備えて排水溝を設ける。
- 4月13日(土) 雨
残土置き場決定。調査区周壁土止めの作業。環境整備
午後、室内作業(写真・図面整理・遺物洗濯)。
- 4月14日(日) 曇り後晴れ
南北トレント塗面実測。足跡群実測。F10区第5層
上面まで振り下げ。足跡群の踏み込みと、回転の軸跡
- から畦の存在を検討。南北トレント西壁面で検出した
4個所の撮影は、埋土と丸太の遺存状況から井戸では
なく、高井樋開削施設であろうと考えた。
- 4月16日(月) 曇れ後晴り
トレント土止め杭・コンパネ崩壊により撤去。崩壊
個所修復作業。16時、降雨により作業終了。
- 4月17日(火) 曇れ後晴り
トレント内崩壊土跡跡。安全対策。バックホー搬出
空撮打ち合わせ(写真エンジニアリング株式会社・光
本・柴山氏)。
- 4月18日(水) 曇れ時々晴り
南北トレント底面検出の河川跡精査。遺物は含まれ
ず。足跡群・水田造構の資料探査。
- 4月19日(木) 曇り後晴れ
トレント精査。足跡群検出作業。トレント断面実測
立会平面精査。下段水田の足跡群実測。
- 4月20日(金) 曇り後雨
ペルコン移設。調査区西半分を南端から第5層上面
統一して振り下げ開始。Dライン以西が完了してい
るので、それを基準として下層造構の検出を指示する。
- 4月21日(土) 雨後曇り
排水処理・シート養生。写真整理。資料作成。
- 4月22日(日) 曇り後晴
上塙S K02平面精査。西壁断面に対応するものがな
く土壇としたが、溝状造構の場合も考えておく必要も
ある。断面実測。
- 午後、大音響とともに事務所の基礎陥没。被害調査
点検。試掘トレント埋め戻し箇所に設置したものが地
盤の緩みで陥没したようだ。電線を支えていたワイヤー
も破んだ。
- 4月23日(月) 雨後曇り
室内作業(フィルム・図面整理・遺物洗濯・化学処
理=バインダー=0.17~50%溶液含浸)。
- 4月24日(火) 曙れ後曇り
シート除去、乾燥処理。トレント崩壊土掃除作業。
足跡群一部充填。土壤は藻状造構にならないことを確
認したが、土器片・炭化物を含むことから、住居跡の
可能性も周囲のピット群とともに考慮する必要がある
が、それは精査が進行した時点で検討したい。
- 4月25日(水) 曙れ後晴り
足跡群一部充填続行。平面実測続行。写真撮影。
- 4月26日(木) 曙れ
連体を前に、安全対策として、東西のブロック壁か
らの進入を防ぐ手段として、ブロック上に目隠し工事を
を行う。
- 中段水田足跡群検出作業。空撮実施方法協議。
- 4月27日(金) 曙れ
水田下段精査。足跡群実測(水田中・下段)。足跡幅

- 16×14cm確認(G 5区)。門扉修理。環境整備。
- 4月28日(土) 晴れ
進入防墻シート設置工事完了。G 4・G 5水田中下段足跡挖掘作業。H110×第5層精査。遺物取り上げ。す C 4区第5層精査。三倒商事へ遺物処理用具・収品発注。
- 4月29日(日) 晴れ一時雨
写真・遺物整理。資料作成。
- 4月30日(月) 晴れ
遺物洗浄・整理・化学処理(20%溶液含浸)。
- 5月1日(火) 晴れ
写真撮影ヤグラ移設。足跡群完掘。第6層上面精査開始。遺構検出作業。
- 5月2日(水) 曇り時々晴れ
C・Dライン以内第6層面遺構検出作業。土壤02は切り合いか認められ、隅九方型の住居跡になることとも考えられるが、土壤層の可能性もあり、炭化物の広がり方も考慮すべきと考え、結論を出せず。
- 5月3日(木) 雨
資料作成。排水処理。
- 5月4日(金) 雨
排水処理。写真整理。
- 5月5日(土) 雨後曇り
排水処理。遺物整理。
- 5月6日(日) 晴れ
排水処理。シート洗濯・乾燥。吐煙炉。C6~9H(第6層上面まで)振り下げ。足跡群の被害状況確認。
- 5月7日(月) 曇り後雨
トレンチ削壠土追削。Dライン以西の吐煙土。午後降雨により作業中止。室内作業。
- 5月8日(火) 曇り後晴れ
D・Eライン以西の吐煙土。トレンチ壁修理。土壤部分の崩壊測定。写真撮影。
- 5月9日(水) 晴れ
南北トレンチ東壁土止め作業。以後仰面精査は不能 D7~8区・E8区第5層面精査。C9~10H・S K02土壤の平面精査。ベルコン移設。写真撮影。
- 5月10日(木) 晴れ
トレンチ上止め養生作業。高圧線鉄塔根杉壁面崩壊により、方形に資料を、振り下げる。根出立構造及び擾乱部分処理。トレンチ土止め養生。
- 東西トレンチ壁面整理作業中、第6層(淡黄橙色磁砂(10YR 8/3))より右舷1点出土。他に遺物無く、検討を要する(雑文時代のものか)。
- 5月11日(金) 雨後曇り
遺物火測。写真整理。書類整理。
- 5月12日(土) 曇り
資料最終。
- 5月13日(日) 曇り
資料整理。土器火測。
- 5月14日(月) 曇り後雨
残土処理。降雨により、作業午前中で中止。室内作業(遺物整理・実測)。
- 5月15日(火) 曙れ時々曇り
排水処理。足跡群精査。擾乱孔掘り下げ。3ライン以北精査。Gライン吐煙去。
- 5月16日(水) 曙れ
ベルコン移設。第6層面精査(西半分)。
- 5月17日(木) 曙り時々雨
3ライン以北の足跡群検出作業。土止め杭・コンバネ撤去。G4H(足跡から砂動開窓上)。撮影後取り上げ。
- 5月18日(金) 曙り時々雨
土器洗浄・化学処理。
- 5月19日(土) 雨後曇り
排水処理作業。台風3号接近の影響で土止め箇所の大部分崩壊。被容甚大。遺物実測。足跡群実測回トレス。
- 5月20日(日) 晴れ
G11区以南の吐煙土。午後資料を求めて八尾市歴史民俗資料館見学。資料購入。
- 5月21日(月) 曙り後雨
11ライン・F区以西の吐煙去。6層面まで振り下げ。H10・H10区に遺物集中。第6層まで振り下げて確認。F10H(第5層下面より金属片出土。遺存部分から鐵の間縫ではないかと考えたが、検討必要)。H10区で検出した裏(4月6日に逆転状態確認)完掘後撮影、取り上げ。
- 5月22日(火) 晴れ
調査全城シート養生。作業部分のみ撤去。11ラインF区以東の吐煙土。昨日の遺物集中箇所を中心に精査し、蛇行する溝状遺構と判断。平面で範囲を確認する
- 5月23日(水) 曇り
昨日検出の溝状遺構にS D01の名称を付け、平面積算する。1本が多数分岐している状況を確認。写真撮影。E3、E2、B2、C2区、第3層面の足跡群検出作業。
- 5月24日(木) 晴れ
写真撮影により、全城消掃。溝状遺構はH10区を中心として広がるSK01土壤で消滅し、高低差から、これを源として、北西に流れるものと判断する。土壤・溝状遺構とも被容可能な土師器片多し。土壤から鉄器とみられる遺物も出土したが、號等により取り上げは控え、撮影のみ行った。21Hのものとて2点となり。他の遺構には見られない現象である。その上、炭化物をも含んでいる。
- 5月25日(金) 晴れ
第6層面全面精査。検出遺構ホワイト表示。写真撮影。
- 5月26日(土) 晴れ
本日より作業員5名体制。写真撮影。ダンプ・パック

クホー撮入。残土処理。SK01・SD01検査。遺物検出作業。第6層検出の構造物3本(SD02～SD03)完掘作業開始。

5月27日(火) 晴れ

SK01, SK02, SD02～05掘り下げ。遺物検出作業。SK01箇所で3個所の壠形が判明した状況で検出。

5月28日(水) 晴れ

SK02, SD01遺物検出作業。SD01は蛇行する部分で分岐し、SK01との接続部分で合流する。磨製石斧出土。

5月29日(木) 晴れ

写真エンジニアリング(壁面)空撮準備作業(割り付け、杭打ち)。仮B.M.レベル再確認。市役所水準往復平均値21.760m。既製図面数値訂正。SD02～05, SK01完掘作業。大阪商業大学監修補助教授の研究室へ花粉分析の件につき相談。プラント・オパール分析がよいのではないかとの教示を得た。

5月30日(金) 晴れ

写真撮影用ヤグラ設定。北摂張区(3ライン以北)瓦跡群検出作業。

5月31日(土) 雨後曇り

第6層面の瓦跡検出作業。SK01完掘作業。上蓋整理
6月1日(日) 雨時々曇り

上器接合作業。化学処理。

6月2日(月) 雨後曇り

排水処理。シート洗浄。鉢瓶込足跡群検査。土器実測。降雨により追進したSK01の遺物回収。化学処理。

6月3日(火) 晴れ

発掘調査現場入口歩道上に仮B.M.設定。21.867mの数値を記入。再確認の必要あり。

6月4日(水) 曇り後雨

第6層面以降検出作業。SK01, SD01平面実測。空撮用割り付け杭打ち作業(写真エンジニアリング)。

6月5日(木) 雨後曇り

土器接合作業。写真整理。土器実測。排水処理作業

6月6日(金) 晴れ

第6層面検査。SK01の西半分底面でピット2個検出。廃棄が激しい土6袋片出土。時期不明。

6月7日(土) 晴れ

第6層面9ライン以北精査。頭の痕跡とみられるスジ状の壠形検出。G 9区開削、第6層面まで掘り下げる。その結果、SD02がGラインの手前で途切れることを確認し、溝状追跡SD06を新たに検出した。但し土器は含まないようである。

6月8日(日) 晴れ

SK02実測。午後2時30分杉山団長視察。3時30分市教委職員2名視察。協議の結果。

①入口の建築予定部分の調査実施。

②建築予定で本調査部分となっている北側の完掘。

③空撮を7月中旬に実施するのでそれ以前に拡張し、

検査はそれ以後とする。從って拡張部分の検出追査は製図段階で調整する。

④検査対象の最終造構面を第6層とし、以下は調査最終段階でトレレンチによって検査・記録する。

⑤天美で検出した足跡群の資料を市教委が提供すること。

以上の5項目とした。

6月9日(火) 雨後曇り

室内作業(土器接合・化粧処理・実測)。

6月10日(水) 晴れ

資料整理。土器整理。

6月11日(木) 晴れ

調査区撤水。土器整理。

6月12日(金) 晴れ後曇り

シート整理。撤水作業後トレレンチ壁面修復。崩壊土排除。5E・G区・7G区第6層面まで掘り下げる。土器は焼器で廃棄が激しく、皿は激減する。7G区で径約1mの円形撮影を検出。検土杖で確認したが、深い。井戸跡の可能性が考えられるが、掘り下げは廻囲の進行状況で決定することにした。

6月13日(土) 晴れ

撤水後シート養生。土の乾燥が激しい。トレレンチ崩壊土排除作業。昨日の円形撮影平面清掃後写真撮影。掘り下げ開始。柱穴と考えたが、周囲に周連する壠形は見当たらない。井戸跡としても遺物は無く、曲物も見られない。なお検討が必要である。とりあえず今は井戸状造構S606の名前を付けておくことにする。午後4時、市役所職員2名(市史編纂室)見学。説明し、丹比柴蘿宮跡について検討する。

6月14日(日) 晴れ

バックホー搬入。残土処理・調査区域拡張開始。擾乱激しく残土盛り場に利用した。SD05遺物検出作業完了。G 4区第6層面で構造物SD06検出。

6月15日(月) 雨

大雨・雷暴警戒発令。土器整理。排水処理作業。トレレンチ内壁に大電脳、崩壊の恐れあり。

6月16日(火) 雨後曇り

雨水処理。上蓋整理(接合・実測)。

6月17日(水) 晴れ

シート撤去、洗濯・乾燥。調査区東壁面の杭・コンバネ撤去。壁面修復作業。G 3区検出のピット平面実測撮影後、半分カットして土器検出作業。腰を壊して埋めるとみられるが、個体は複数である。表面から45cm盛り下げた時点で、底の底部が壊った形で遺存していることを確認。「埋葬」の可能性を考えたが、結論は出せず。

6月18日(木) 晴れ

拡張X北端に幅50cmのトレレンチを設定したが、擾乱が激しい。全城検査。空撮準備体制に入る。2ライン

以北第6層面まで掘り下げ。上層の足跡から上部を踏み消した痕跡を確認。土器・神功開寶とも床土形成時に混入したものが、耕作時に踏まれたと判断した。6月19日(火) 晴れ
第6層面全域精査(検出遺構掘り下げ・白線表示)拡張区残上処理完了。拡張区第6層面まで掘り下げ完了。土器化学処理。

6月20日(水) 晴れ
シート整復。全域踏査。検出遺構白線表示作業。

6月21日(木) 晴れ
午前9時～11時、バルーンによる空撮作業(写真エンジニアリング実施)60カット。午後拡張区の遺構検出作業。全面シート養生。

6月22日(金) 晴れ
足跡群の重複激しく、各個体の確認は困難。写真撮影。入口看板撤収。

6月23日(土) 晴れ
土の乾燥激しく、遺構検出作業に支障。第6層面まで掘り下げ、シート養生する。トレンチ崩壊を放置できず、高圧鉄筋基盤崩壊とともに埋め戻した指示。

6月24日(日) 晴れ
室内住家(土器接合・実測・図面整理)。

6月25日(月) 晴れ後晴り
作業休止。資料整理。

6月26日(火) 晴り
朝のミーティングで、雨に対する排水処理方法検討拡張区トレンチ・平面精査後写真撮影。遺物化学処理。

6月27日(水) 雨後晴り
排水処理作業後、土器整理。

6月28日(木) 雨後晴り
上部整理(接合部・実測)。シート除去後、全面処理するも、湿度により作業進行せず。乾燥時間が必要と判断。作業終了周辺に松原市教委尼立・篠田氏視察。今後の作業計画と、提出書類について教示を得る。天氣で出上した足跡の資料は未報告で、今は資料を提供することはできないと通告される。

6月29日(金) 晴り
各遺構平面実測準備。土器整理。

6月30日(土) 雨後晴り
室内作業(土器接合・実測・写真整理)。

7月1日(日) 雨後晴り
拡張区第6層面精査。遺構検出作業。

7月2日(月) 雨
図面トレース(足跡群)。

7月3日(火) 雨後晴り(大雨注意発令)
午前中集中豪雨。調査区周囲大崩壊。トレンチ・検出遺構も被災大。土器整理(洗濯・実測)。

7月4日(水) 雨後晴り
土器整理。シート撤去。入口に設定した拡張区(6×6mの範囲)、以後6×6拡張区(と呼ぶ)の掘り下げ準備。

7月5日(木) 晴れ時々曇り
バックホー搬入。トレンチ埋め戻し。ベルコン設置

7月6日(金) 晴れ
トレンチ埋め戻し、崩壊部分修復。SK01・SD01実測完了。残土処理。北側拡張区遺構検出作業。撮影用マグナ移動。

7月7日(土) 曇り
検出遺構平面実測・レベル落とし。調査区北端に東西トレンチを設定し、掘り下げる。

7月8日(日) 晴れ
図面整理・確認作業。上器実測。

7月9日(月) 晴れ
トレンチ内湧水排出。遺物実測。

7月10日(火) 晴れ
6×6拡張区足跡群精査。バックホー搬出。拡張区平面実測。高圧鉄筋基盤過去に関する作業の依頼を山形工匠店から頼まれたという業者が訪ねて来だが、終了まで工事は出来ないと説明し、富士住建へ連絡。

7月12日(木) 曇り後晴れ
6×6拡張区足跡群完期。写真撮影後掘り下げ開始。杉山課長から発達調査許可書が届いたとの連絡あり。最終視察日を31日とすることに決め、その時に受け取ることにした。

7月13日(金) 曇り後晴れ
昨夜の大暴雨で、現場全体がブルーになった。排水整理に1日費やす。6×6拡張区第6層面まで掘り下げ

7月14日(土) 曇り
6×6拡張区検査。写真撮影。

7月15日(日) 晴れ
6×6拡張区第6層面遺構検出作業。現場内除草。

7月16日(月) 晴れ
6×6拡張区で検出した溝状遺構にSD10の番号を付す。溝崩れ須恵器片1点検出。これまで検出している溝状遺構からは須恵器は含まれず、最も新しい溝状遺構であると判断した。

7月17日(火) 晴れ
6×6拡張区周壁精査。Ⅲ耕土層で造営する山形は島の底跡と判断、從って水田の一部は島として利用されていたことを確認した。

7月18日(水) 晴れ
6×6拡張区のSD10を完掘した結果、山高北低の地形であり、現在の地形と比較する必要がある。

7月19日(木) 晴れ
6×6拡張区周壁に沿ってトレンチ設定。掘り下げ

開始。蓋拂平面実測。

7月20日(土) 晴れ

6×6拡張区検査追構白線表示作業。写真撮影。トレンチ塗め戻し後、コンパネを敷いて土を安定させる

7月21日(日) 晴れ

ペルコン・ポンプ・借用資材返却。雨庇撤去。プロック塀・設置のシート撤去。遺物復原。

7月22日(月) 晴れ

6×6拡張区の残土を調査区南壁の東西トレーンへ運んで埋め戻す。シート除去。洗浄・乾燥後片付け。

7月23日(火) 晴れ

調査区外壁整形作業。6×6拡張区トレーン排水修理の戻し作業。写測、1/20素面持参。校正作業。平面・斜面積算完了。尖削面れ確認作業開始(拡張区現地の造構圖を素面にに入るため)。

7月24日(水) 晴れ

平面最終積算開始。井戸状造構S E 01湧水鉛封後、崩壊土を排除し、元の形を確認する。曲物・遺物は無かった。山形工務店池野氏より、現場埋め戻し作業開始の件、足場板・脚踏施設等リース品撤去の件につき連絡あり。埋め戻しは現場完了後、その他リース品の撤去は何時でもよいと返答する。

7月25日(木) 晴れ

調査区南端から最終積査。検出造構白線表示。足場板・シート・コンパネ撤去、洗浄・乾燥・片付け。荷合の私物整理(搬出準備)。

7月26日(金) 晴れ

6×6拡張区平面間にレベル轍下。検出造構1/10圖作成。8月12日撤収決定。運送会社へトラック手配。

7月27日(土) 晴れ

防護施設撤去・撤出。検出造構1/10圖落す。拡張区検出造構完成作業。搬出荷物整理。除草作業。

7月28日(日) 晴れ

私物・資料・道具を草津市の畠七へ運搬。

7月29日(月) 晴れ

搬入品整理。現場着用検査校正・事務所整理事業。

7月30日(火) 晴れ

6×6拡張区排水処理。検出造構白線補正作業。井戸状造構S E 01整理。

7月31日(水) 晴れ

白線表示補正作業。素面校正完了。全般撮影。午後移山兵团長視察。検出造構を検討しながら、遺物を含むビットを抽出され、北東部分で多角形の破物一棟分を想定された。今後の作業工程・終了日協議。了承される。岩本氏へ8月12日完了前に松原市教委が最終確認するよう連絡依頼。バックホー搬入(最終確認トレンチ掘削・6×6拡張区深掘作業準備)。

8月1日(木) 晴れ

調査区Fラインに沿って幅約1mのトレンチ掘削。

追構断面。下層部分確認作業。6×6拡張区深掘。第6層下は厚い砂層の堆積となり、北西方向へ流れる河川が存在したことを確認。砂層から自然遺物(木本・種子)の包含層を検出し、ある時期に溜まりとなっていたことが考えられた。層中から弥生土器片とともに绳文晚期とみられる土器の把手が1点出土した。これによって田河川の時期を再検討しなければならない。

8月2日(金) 晴れ

井戸状造構S E 02の西半分カット。断面実測。トレーンチ断面検査。6×6拡張区検査。杭・シガラミ等の施設は無く、自然河川の一部を検出したということであつた。午後2時松原市教委立氏に最終検査依頼明日11時頃検査に来るとの返答を得た。

8月3日(土) 晴れ

6×6拡張区全量撮影。断面実測。採集。トレーンチ検査。発見届け用遺物撮影。11時30分足立氏視察。終了報告と、問合提出書類作成につき指導を得る。6×6拡張区・北北西区埋め戻し完了。遺物写真完了。

8月4日(日) 晴れ

トレーンチ検査・断面実測。井戸状造構断面実測。コンバネ・シート・排財処理。安西美原営業所へ送船。

8月5日(月) 晴れ

終了報告書類作成。発見届け書類作成。

8月6日(火) 晴れ

バックホー搬出。荷類作成。

8月7日(水) 晴れ

トレーンチ・井戸状造構埋め戻し。現場内清掃・整理。

8月8日(木) 晴れ

埋め戻し作業続行。終了報告資料作成。宿室作業(未が引き伸ばし・焼付)徹夜作業になった。

8月9日(金) 晴れ

東西トレーンチ裏塗埋め戻し。焼付写真整理。書類作成(遺物トレス)、終了報告必要部数完了。

8月10日(土) 喜り後晴れ

台風11号の影響で、風強し。朝一番、松原署へ見見届け提出。会計課では久し振りの届け出だという。

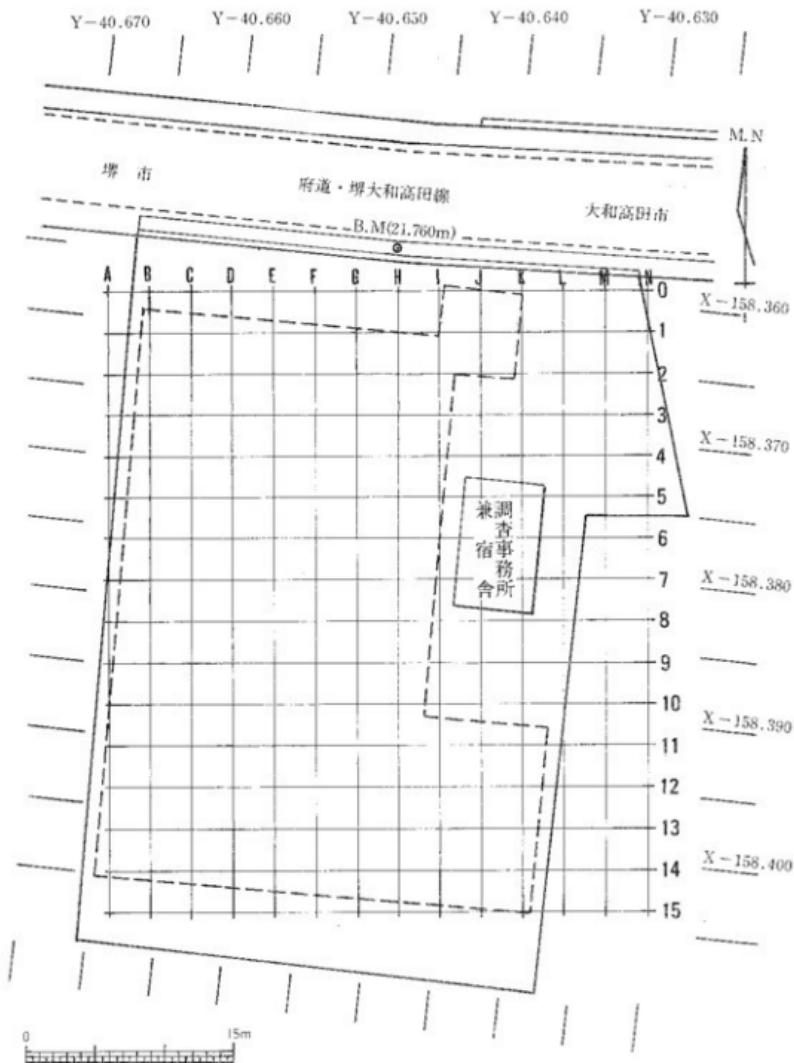
山形工務店池野氏より、シート・コンパネ、資材を回収したいと連絡あり。最終処分については富士住建と最初に協議済みと思っていたので、安西へ移動したと返答するが、山形が購入した資材なので回収したいという。尾崎氏に説明し、倉庫への回収を依頼し、山形工務店立ち合いで返却する。若木氏にこの経緯を説明し、預かっていた鍵(事務所・門扉・廃土処理場)を返却する。

8月11日(日) 喜り

撤去作業。荷物点検。松原市教委の発掘現場見学。

8月12日(月) 晴れ

現場撤収。大朝調査員最終確認のため残る。滋賀県草津市の畠七へ一切の荷物を運搬。



第7図 調査地割り付け図

第4章 発掘調査の成果

今回の調査は、発掘調査面積に比べて期待したほどには遺物も遺構も出土せず、当初の目的であった上田町式の上轟を包含する層も、丹比柴籬宮跡に関する遺構・遺物も検出できなかった。調査開始から前半は集中豪雨の処理と、後半は記録的な炎天続きに悩まされつつ、中世の水田“足跡群”と本遺跡では未発見の遺物を得たことは、今後の調査を進めていくうえで、貴重な資料を提供したといえるだろう。以下、各項目別に調査の成果を記す。

1. 層序（第8図）

基本的には予備調査で確認されたものと同じであるが、地形から調査地内の南北で若干相違があり、同一層でも組成・色調に違いがみられる。現時点の地表を形成する盛土は全域に施され、80cmから1mの厚さで堆積し、下層から整地以前の排水施設・ガス・水道管が遺存していた。

この層を境にして、現代の耕土・床上層となる。これを第1層としたが、高圧電線の鉄塔はこの時（1963年）に設置されたものである。その埋め立ては、鉄塔が撤去されたのが1982年11月であるからそれ以後、断面観察結果から、水田が當に転換された時期＝稻の刈り入れを済ませた後のことと判明した。

第2層は近代～近世の耕土層、第3層は中世耕土層、第4層を遺構・遺物の状況から床土とし、“上層遺構”として処理した。

第1層から4層までを耕土・床土層として捉えるなら、中世あるいはそれ以前から現代に至るまで嘗々として水田耕作が続けられていたことになる。

第5層から6×6拡張区を除き、安定した堆積がみられる。第5層には須恵器・土師器・陶磁器片を含んでいることから、遺物包含層とした。続く第6層では古墳時代初頭の遺物を主として含む遺構群を検出したことから、“下層遺構”として処理した。これ以下の層は、各トレンチで確認した。

6×6拡張区の第5層以下では砂を主体とした層が堆積し、弥生時代（あるいはそれ以前）に存在した自然河川を確認した（第8図は付図と共に挿入した）。

2. 出土遺構

（1）上層遺構

a. 水田跡

調査区全般で第4層〔オリーブ褐色(10YR 4/2)粘質土〕上面整理事業中、湿润な土壤であったことが幸いしてか、ヒト・偶蹄目の足跡とカラスキによる耕作痕を検出し、床土であったがゆえに擾乱されずに残ったと判断し、これを精査すれば、当時の水田の状況を復原することも可能ではないかと考えた。

水田跡は三段の段差をもつ棚田で、G-6区南東隅から南西隅へ延びる落差が上段（上段

水田)と中段(中段水田)の境であり、F-3~4区・G-3~4区にまたがるL字型段差から北側が下段(下段水田)となる。上段と中段の境界段差は調査面では擾乱によって検出できなかったものの、東壁断面で段差を確認しているので、東への拡がりを予想することができる。

畦畔については、調査区全域と段差周辺を丹念に観察したが、確認できなかった。足跡については次項で述べるが、G-4~5区にかけて足跡のUターン運動とみられるものがあるので、下段水田のL字形コーナーからG-6区の上・下段差西端部にのびる南北の畦畔を想定することは可能である。

第3・4層から磨滅の激しい土器・須恵器・黒色土器片が多数含まれていることによって、12世紀初頭(平安後期)から中世と考えている。

b. ヒト・動物=偶蹄目:ウシ足跡(第9・10図、付図1・口絵3・図版3~7)

検出したものを便宜上“足跡群”と総称した。水を多く含んだ粘質の強い状態で踏み込まれ、その跡ゆっくりと耕土が流れ込んだようである。

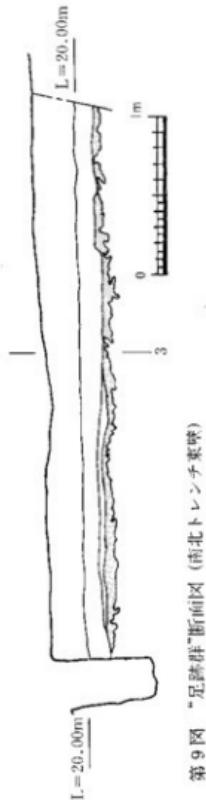
足跡の方向は、殆どが東西方向の運動性が認められるが、若干の方向転換、すなわちカラスキ(肩動き)による田おこし(鋤先を土中に踏み込んで土を反転させる作業)を行う際に、畦畔の近くまで来てカーブを描きながらゆっくりと方向転換したとみられる。また、中段・下段の段差では、中段段差の上から下りたとみられる足跡と、逆に登ったとみられる足跡を確認した。この足跡は、L字形コーナー部分に集中し、足跡の重複も激しかった(第10図)。

足跡の法則性を検討したが、実際のところ重複が激しく、指先まで検出したG-5区の足跡を標準サンプルとしてこれらにあてはめてみたが(第10図・付図1)、無秩序な方向のものが多いため、一応の試案ということで御了解願いたい。

個々の足跡については既述の足跡が大人とみられる左足で、5本の指が鮮明に残っていた(口絵3・図版6)。

動物の足跡も、ヒトと同じ東西方向の運動性が認められ、それらは逆ハ字状のものと馬蹄型のものがあり、その特徴と形状から偶蹄目(牛か馬)の足跡と判断し、周辺遺跡の例からウシであろうと考えた。

この足跡は、田おこしの際にカラスキを牽かせた時のものであり、ウシの背中にはカラスキを繋ぐ鞍がのせられていたはずである。



これら足跡群のほかにも大小不整形な穴が検出され、椎株の痕跡ではないかと考えたが、それを証明することはできなかった。

c. カラスキ（唐錫）痕

わずかではあるが検出することができた。足跡群と同じ東西方向のものであるが規則性はみられず、0.4~1.5mを確認したのみである。何度かの床土張り替えによってこれだけしか遺らなかつたのであろうか。

(2) 下層遺構

a. SK01土壙（第11図・図版2・3・図版8.9）

南北2.1m、東西4.6m、最深部33cmを測る東西に長い不整形橢円を呈する皿形の土壙である。

埋土中から多くの土師器・炭化物とともに鉄製品（鉄錠とみられる）・青銅製品（小形彷彿鏡）が出土している。土師器の中にはほぼ完形の小型丸底壺もある。

位置は調査区の南端や東寄り、F・G10~11区にあり、SD01溝状遺構と切り合っている。断面観察によればSD01をカットしているので、これより新しく掘られたことが判る。

炭化物の括りは埋土中の西北を中心に認められ、その中には焼土と二次焼成を受けて脆くなつた土器片も検出された。

上壙の底面には杭の痕跡とみられる径3~4cm・深さ5~10cmの小ピットを確認しているが、いくつかのピットの埋土中に土師器の細片が含まれていた。

ピットに方向性も規則性も無いことと、含まれる遺物によって、ここで何らかの祭祀が行われ、ピットはそれに付随する施設ではないかと考えたが、類例の検討をする。

b. SK02土壙（第12図・図版3・図版8.9）

SK01の北西、D 9区で検出した。南北トレンチ設定時、東壁面で確認していたが、西壁面にみられないことからその範囲でおさまるものと判断した。

東側の一部が擾乱されているが、東西3.2m、南北4.4m、最深部42cmを測るL字形を呈するスリバチ形の不整形な土壙である。

埋土中には土師器（壺・甕）片の他、炭化物・続の種子が含まれていた。土師器の中にはほぼ完形のコップ状の受部をもつ器台が出土している。

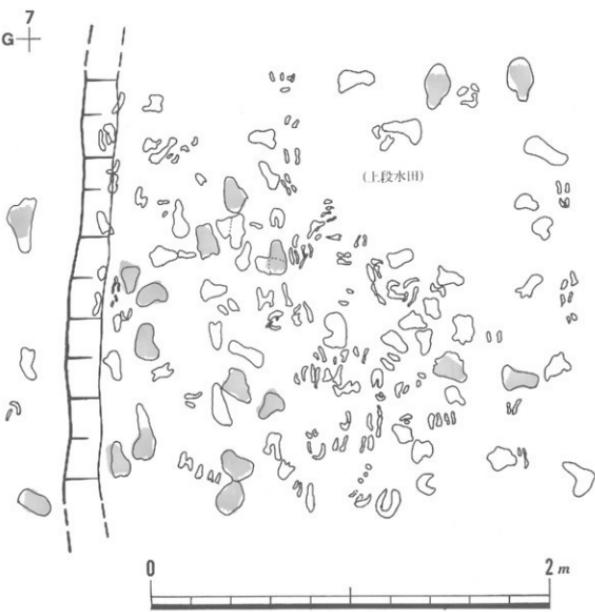
土壙の性格は不明だが、SK01と同じく底面に杭状の小ピットが認められるところから、何らかの施設が付属していた可能性が考えられる。

c. SD01溝状遺構（第11図・図版8.9）

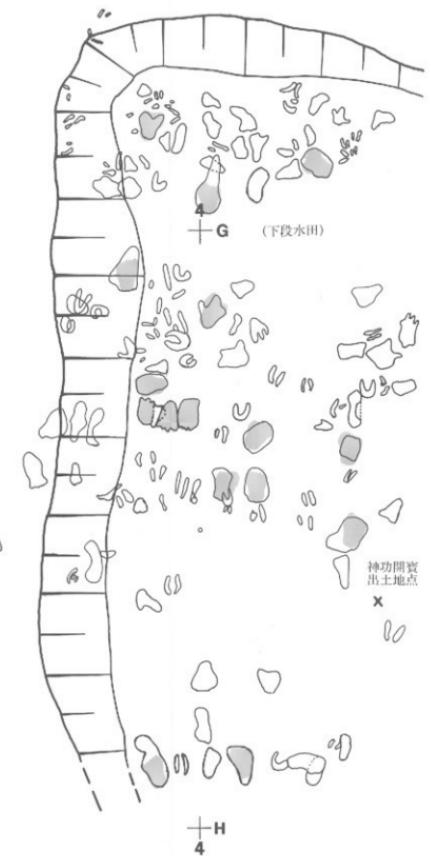
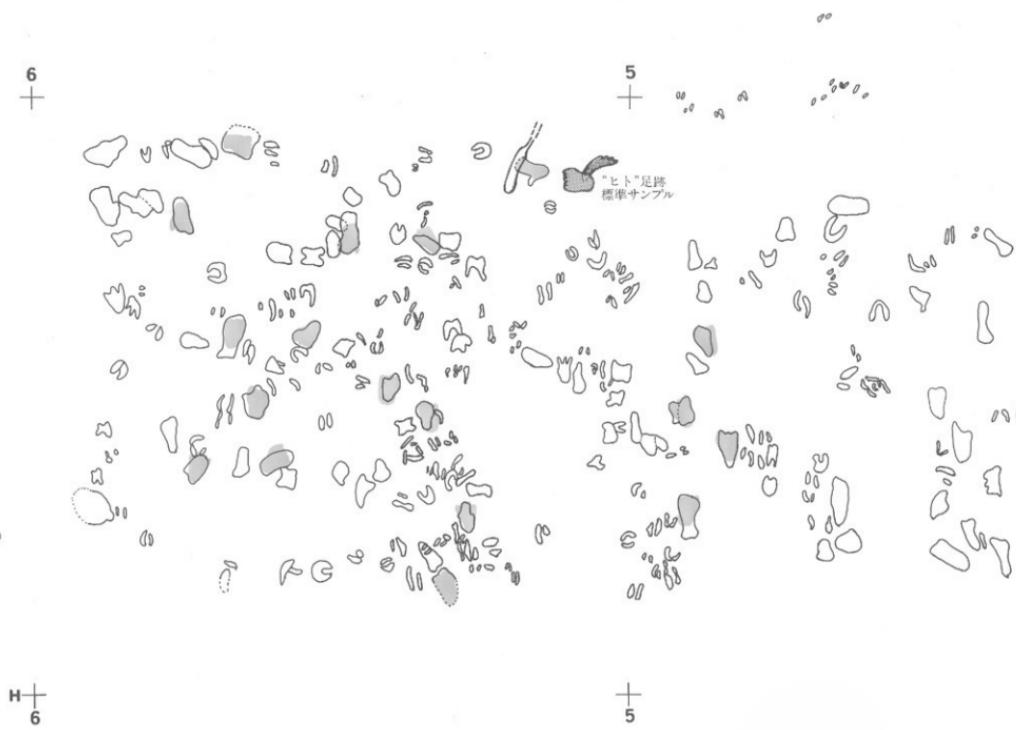
SK01と切り合つて東へのびるもので、西から東へ流れていたことは溝の高低差で確認している。数箇所にオーバーフローがみられることから、弱い蛇行を描きながらも、その流れが激しかつたことが考えられる。

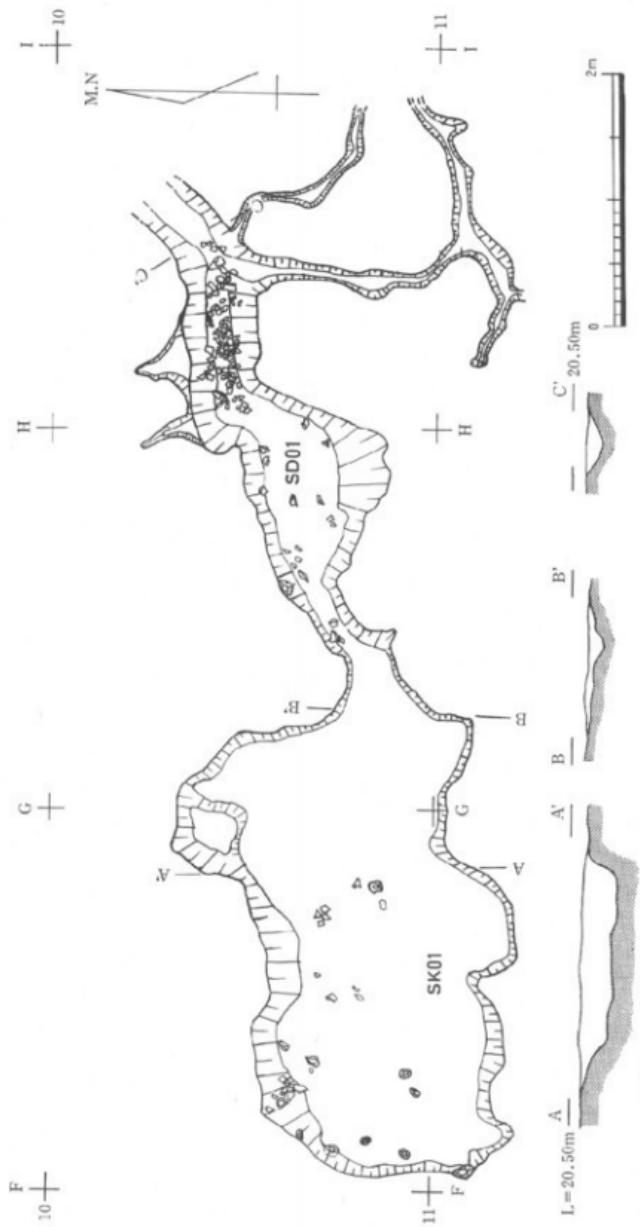
溝は楕形の断面形状を呈し、埋土中から多数の土師器片とともに磨製石片が出土した。遺物の出土状況から、一気に流れた後に堆積したものと思われる。ピットはみられない。

検出範囲だけでその性格を特定するのは困難であり、今後の調査に待ちたい。



第10図 “足跡群”運動方向推定図





第11圖 SK01土壤・SD01溝狀裂隙測圖

d. SD05溝状遺構（第12図・図版12）

調査区東南隅I-12区で検出した。東西トレンチ設定時に遺物包含層と解釈していたが、精査の時点で溝状遺構であることが判明した。中心軸は南西から北東方向に傾いている。

東西2.1m分を検出し、最大幅98cm、最深部13cmを測る。東西トレンチ南壁面に掘形が残っているので、南西に伸びていることは間違いない、高低差から、南西から北東へと流れるものであると考えられ、西から東へと流れるSD01の延長部分が東側で合流するものとみられる。

埋土中には多数の土師器片が含まれ、壺・甕類が多い。これらの出土状況から激しい流れの中で堆積したことがうかがえる。

遺構底面から杭状のピットを検出し、その埋土中には土師器の細片が含まれていた。このピットはSK01・02で検出したものと類似しているものの、その性格は水量調節などの役割を果たした杭ではなかろうかと考えているが、確認範囲が狭いこともあってそれを確定するには至らない。

e. SD02～04（付図2・図版2・図版8）

調査区のはば中央に位置し、3本とも川の字状に平行に東西方向に並び、全体的に南西から北東方向に傾いている。南のSD02は、長さ5.4m、最大幅16cm。中央に位置するSD3の長さ4.7m、最大幅24cm、北側に位置するSD04の長さ7.1m、最大幅20cmと3本のうち最も長い。それぞれの間隔は、溝の中心線からSD02とSD03間が1.2m、SD03とSD04間が1.4mである。3本とも遺物を全く含まない。

溝の断面形は3本とも緩い逆台字形であり、それぞれの先端部は、溝の中央へむかって弱い傾斜をもちながら落落する。

3本の掘形開始点をみると、SD02と04のはば並行しているが、SD03は1mほど東にずれている。

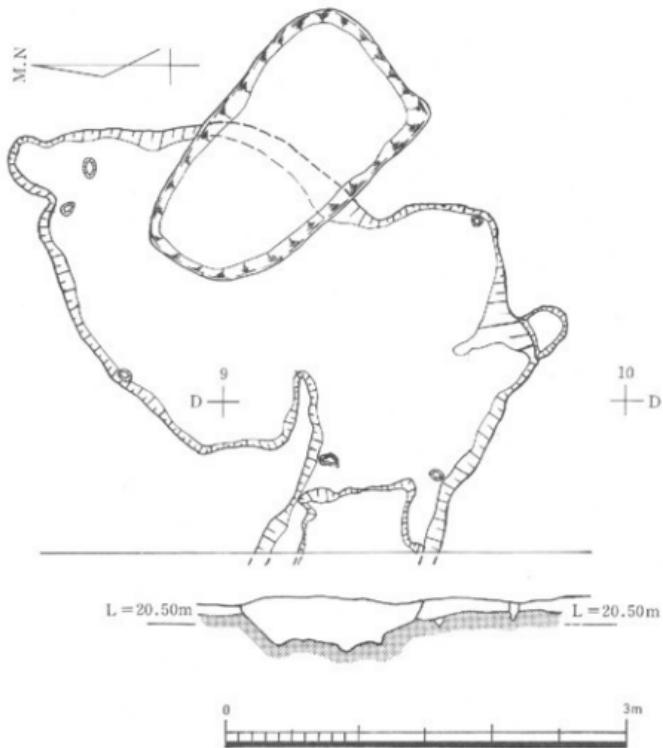
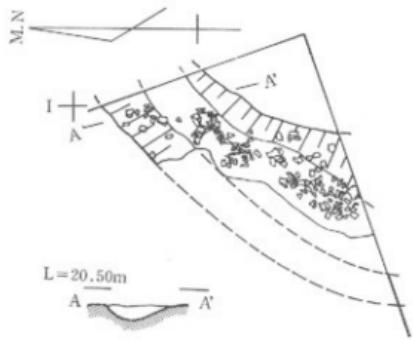
これら3本の溝状遺構の性格については、その東に接して検出したSE01井戸状遺構（第14図・図版15）の存在によって、それに伴う水利関係のものと考えているが、或いは溝状水溝としての機能を果たしていた可能性も考えられなくもないではないが、それを証明することは、現時点ではできない。

f. SP01ピット（第13図・図版12）

調査区北西C-4区で検出した径20×23cm、最深部33cmのピットで、その西側にも2個のピットを検出している（SP02・03）。平面は円形で、断面は真直ぐに落ちる砲弾形である。

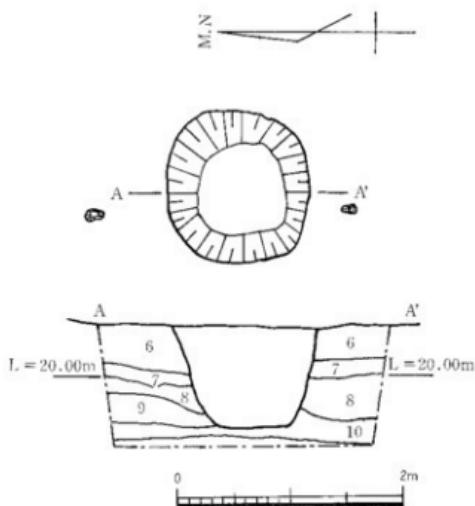
埋土中には検出面からびっしりと土師器片が詰まり、5個体分の甕を確認した。（図版12一上）。ピット底面には、半碎された甕の底部が直立し（図版12一中）、最深部でも碎破された土師器片を検出した（図版12一下）。

これらの土器は単に廃棄されたものではなく、故意に叩き割って投棄したと考えたほうが理解できる。



第12図 SD05溝状遺構(上)・SK02土壤(下)実測図

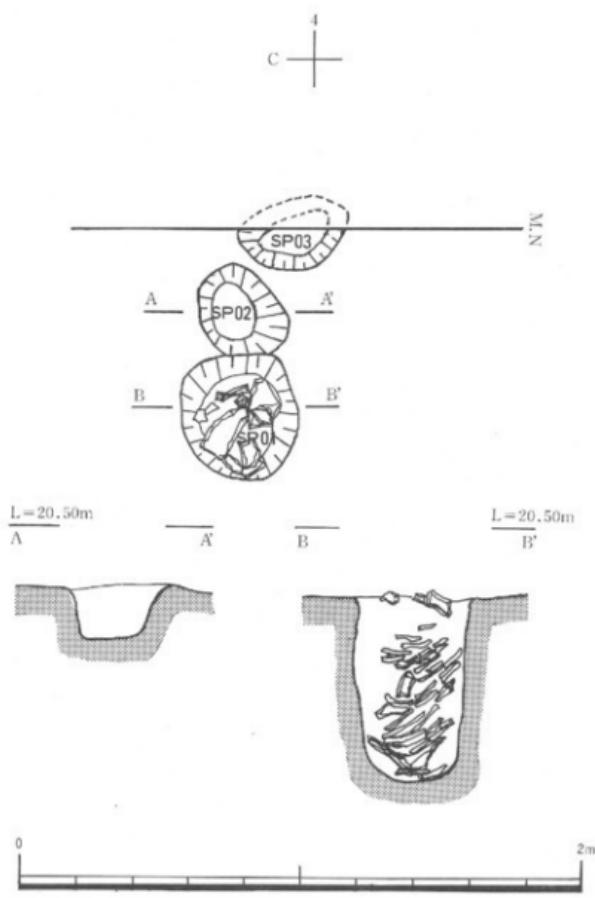
時代は異なるが、これとよく似た例は、兵庫県川西市加茂遺跡84次調査で確認された高床式住居跡の柱穴SB01の埋土中にびっしりと弥生土器片が詰め込まれたものが検出されている。現地説明会資料によれば、「柱を抜き取った後意識的に土器片を詰め込んだ」とある。本遺跡の場合、これを証明することは現時点では困難である。なぜならば柱を必要とする建物跡をこの調査範囲では確認できなかったからである。但し、このピットが普通にみられる上器の投棄ではなく、故意に地面を掘り込んで破碎した上器を詰め込んだこと自体に観測的なものが感じられるが、そのことは別の問題として取り扱うべきと考える。



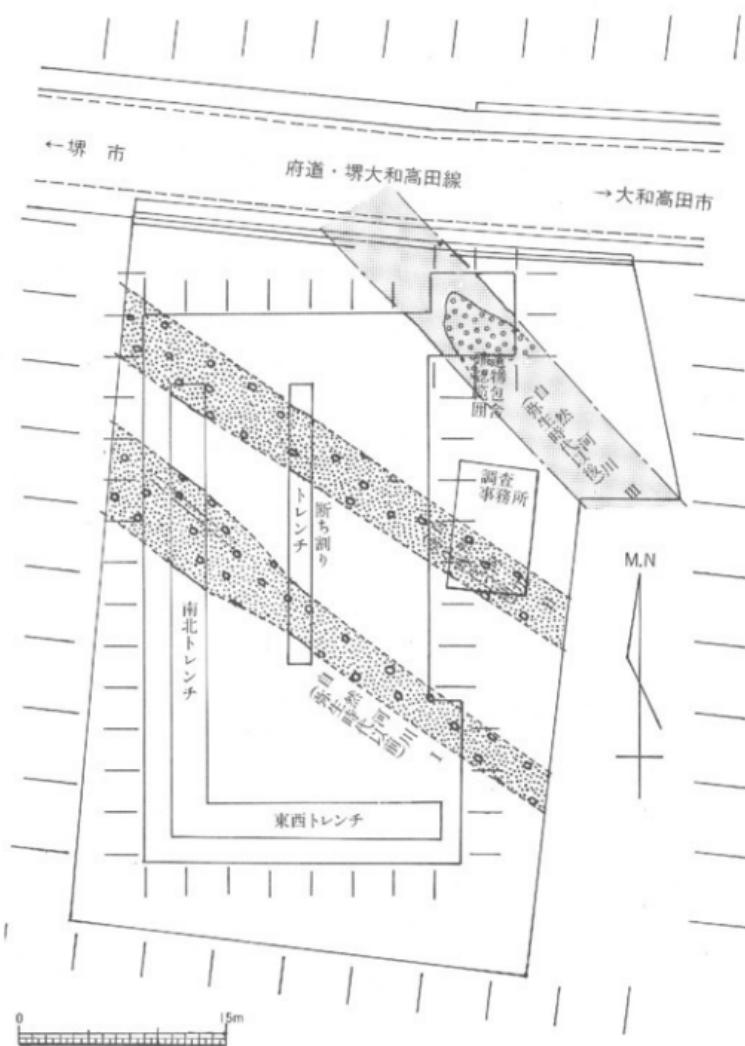
第13図 SE01井戸上遺構断面図（土層番号は、第8図-B断面図土層名と同一）

g. 自然河川 I ~ III (図3・図14図)

南北トレンチのはば中央B-4~7区の間で検出した20・22・24層とその間に有る幅約20cmの砂層(第23層)を検出し、それを精査した結果、南岸に相当する個所で動物の足跡とみられる痕跡を確認したが、幅もせまく、それ以上の追求は安全対策上問題があるとして自然河川が存在した事実だけを確認するに留めた。同様にトレンチ北端とドライイン断ち割りトレンチからも自然河川と思える痕跡を認めた。ともに遺物は含まれなかったものの、6×6拡張区で検出した自然河川に弥生土器片と植物遺体が含まれることと、東西トレンチの第7層から縄文時代の石器が出土したことによって、この2本が弥生時代以前の自然河川であると考えた。3本とも南東から北西方向をもち、ほぼ並行している。しかし同時に流れているとは先の理由によって考えられない。南からI~IIIの番号を付けておいた。



第14図 SP01~03 ピット実測図



3. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、弥生上器・土師器・須恵器・黒色上器・瓦器・磁器・石製品（石鐵・石斧・叩き石・砥石）・金属器（小形彷製鏡・鉄鎌・錢貨）・自然遺物（流木・種子・木の葉）の各種におよぶが、全て破片である。

現場終了時点での松原警察署への“埋蔵文化財発見届”には遺物整理箱12箱分として提出したが、整理過程で接合しているので、出土時点の概数であると御理解願いたい。

個々の遺物は土壤の性質により、土器類は調整痕さえも観察できないほど磨滅が激しくここでは可能な限り図化できたものを、上層から検出した順（遺物包含層・第5層・下層遺構＝第6層面・自然河川＝ 6×6 拡張区）に概説し、観察表にまとめておいた。（番号は挿図中の実測図番号と一致する）。

第5層（遺物包含層）：灰黄褐色（Hue 10YR 4/2）粘質土　出土遺物（第16・17図）

土師器

壺

1. 口縁部分のみ残存。形態は口縁最下部から外側に円弧を描きながらのび、口縁端部は二段の段差をもって丸くおさめている。ここでは壺としておいたが、大型化した高环の受部の可能性も考えられる。

2. 底部欠損。体部外面に右上がりのタタキが施され、“右きき”的人が製作したと考えられる。タタキの単位は四本ともみられるが、磨滅が激しいので確定できない。類例から底部が球形に近い庄内併行期のものとみられる。

瓶

3. 細片で全体の復原可能。形態は外面から内面に向かって孔が穿たれ、瀬戸内や和泉地域で出土する弥生後期から古墳時代初頭のものと同一のものであろう。

上田町遺跡は内陸部に位置するが、同一条件では、兵庫県川西市の加茂遺跡から第84次調査において竪穴住居跡から瓶2点が出土しているので、当時の大阪湾側と、内陸部との交易を考える材料となるだろう。

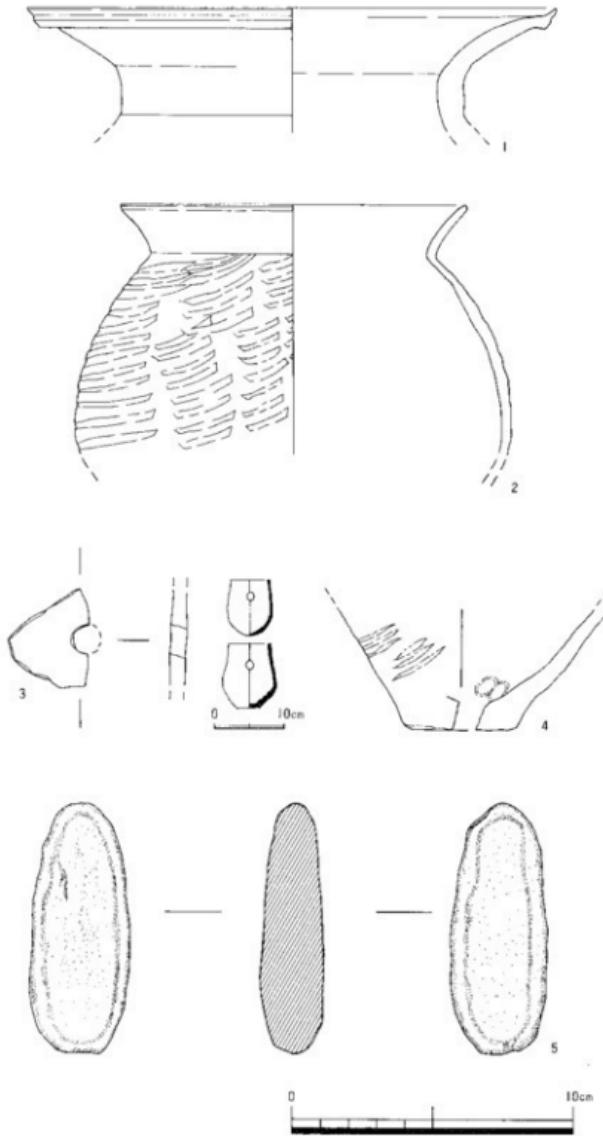
甌

4. 底部のみ残存。体部外面にタタキを施す。底面から内側に向かって、円形の孔を穿ち内面には大小の指頭圧痕がみられる。このタタキも右上がりで、1の甌同様上器製作技法上から“右きき”的人が製作したと考えられ、時期も弥生後期以降という幅を持たせておきたい。

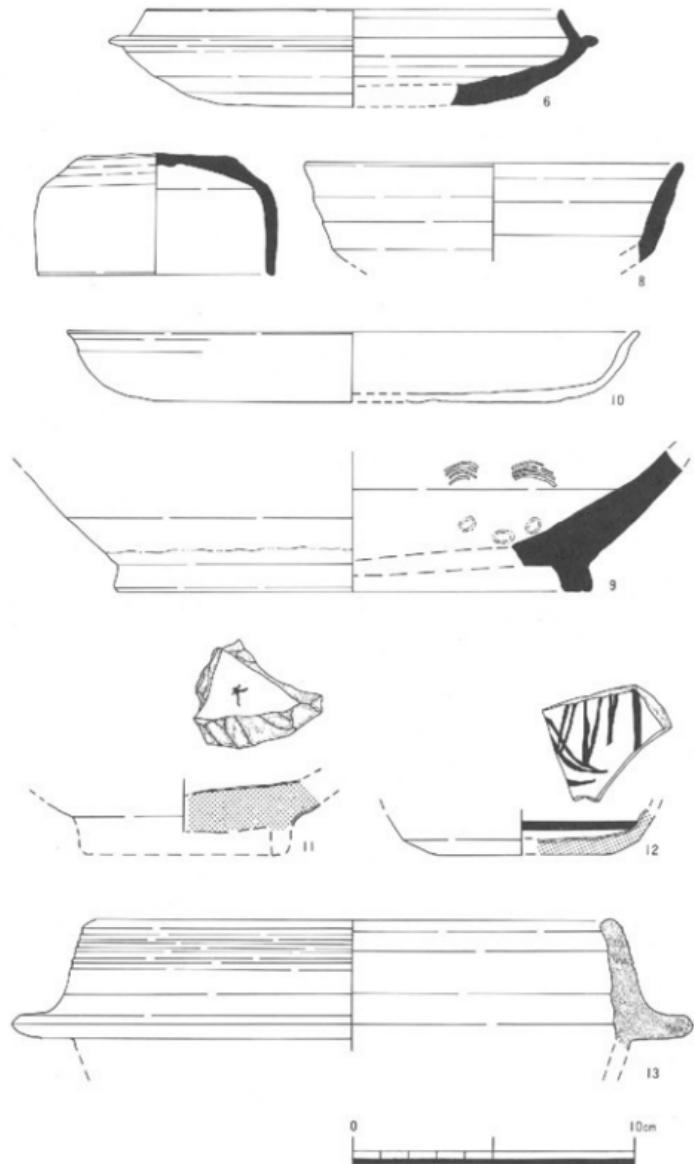
石製品

5. 叩き石(?)

使用痕とみられる磨滅痕を認めたので、叩き石として扱い、図化しておいた。類例・考察等は、今後の検討課題としたい。砂岩製。



第16図 出土遺物実測図 1 (遺物番号は、本文に従った=以下同じ)。遺物番号3は、兵庫県東播磨路第9号住居飯糰壺ビットから出土した飯糰壺の完形品である。参考資料として真野 修「原始・古代の飯糰壺調査の検討」『神戸古代史8』1989年 神戸古代史研究会 から筆者が転載した)



第17図 出土遺物実測図 2

須恵器

6. 坯身・立ち上がりは内側へ傾きながらのび、端部を丸くおさめる。口径15cm、全体の5/6まで、下から回転ヘラ削りが施され、内外面とも強力な回転ナデの調整がみられる。同面にはナデによる3条の溝を有する。

底部を欠いているものの、体部外面の一部に発軸が認められ、シャープさを感じるつくりである。6世紀中頃のものと考えられる。

7. 环巻・回転ヘラ削りが天土部の最上面から施されるが回転ナデの調整も弱く、全体に鈍重さを感じさせる丸いつくりである。

天土部と立ち上がり部の間はゆるやかに内傾しながら天土部へのびている。6世紀中頃のものとみられる。

8. 坯身・口縁のみ残存。内外面とも強力なナデが施され、外面には3条の溝を有する。立ち上がりは、外側へ向かってゆるやかに開きながらのび、端部を丸くおさめている。把手付きの蓋とセットになると考えられ、8世紀のものとみられる。

9. 台付壺・底部のみ残存。ハ字状に聞く高台を有し、器の最大厚は1.7cmを測る。内外面とも回転ナデにより調整されている。内面には扇形の青海波文が4本単位でみられ、最下面には指頭圧痕が残る。焼成は半焼けに近い状態で、磨滅も激しい。7世紀頃のもの。

土師器

10. III・復原口径29.2cm。皿としては大型のものに属す。口縁は外側へのび、端部は落差をもって丸くおさめる。器高は口径に対して低く、2.5cmである。磨滅が激しく脆弱である。10世紀頃のものであろう。

磁器

11. 青磁碗・高台を欠損した底部のみ残存。釉の厚さは1.0mm、明緑色を呈する。ただし底部外面にはみられない。内面に大の字状の刻花文が入る。14世紀・明代のものと考えられる。

12. 青磁小皿・底部のみ残存。内面には草花文が入り、見込みにも一条の線が入る。釉は1.0~1.4mmの厚さで、明緑色を呈しているが、底部外面は生地のままである。15世紀頃のものか。

瓦器

13. 羽釜・口縁はほぼ直立し、端部を丸くおさめている。鉢は水平にのびる。全体的にシャープなつくりで、内面に2条の溝がみられる。器肉は厚く(10mm)、どっしりと落ち着いた感じを与える。底は球形のものであろうが、全体に磨滅が激しい。15世紀中頃のものとみられる。

その他、調査区東壁に沿って設けた雨水処理用のトレンチから韓式系土器片(土師器)が1点出土しているが、排土中からの採集品であり、拓本のみ掲載しておく(第23図-40)

遺構別出土遺物（第18・19・20・21図）

SK01土壤 出土遺物

土師器

14. 盆・底部は安定し、しっかりしたつくりであるが、砂粒が突出するくらい磨滅している。庄内併行期のものと考えられる。
15. 小型丸底壺・口縁欠失。磨滅が激しく、細かい調整は観察できないが、底部の面取りを行った後にユビナデを施したようである。形態は丸く、球形に近い。庄内併行期。
16. 高壺・受部のみ残存。形態は受部から下部下側へのび、落差をもって若干内傾して端部を丸くおさめる。細部の調整は磨滅により観察不能。祭祀に使用されたものと考えられる。庄内併行期のものとみられる。
17. 鉢・ほぼ完形で出土した。安定感の悪い小型の底部をもち、“見込み”から外側へ向かって弱いカーブを描きながら端部を丸くおさめている。

体部外面には広い範囲にわたって煤が付着し、煮沸に使用されたことが窺える。庄内併行期のものと考えられる。

金属器（第19図）

18. 小形彷彿鏡・埋土上層からの出土。残存部分から復原径の数値を8.4cmとした。色調はエメラルド・グリーンを呈す。残存長4.7cm、断面は玉線形で、厚さ0.45cmを測る。

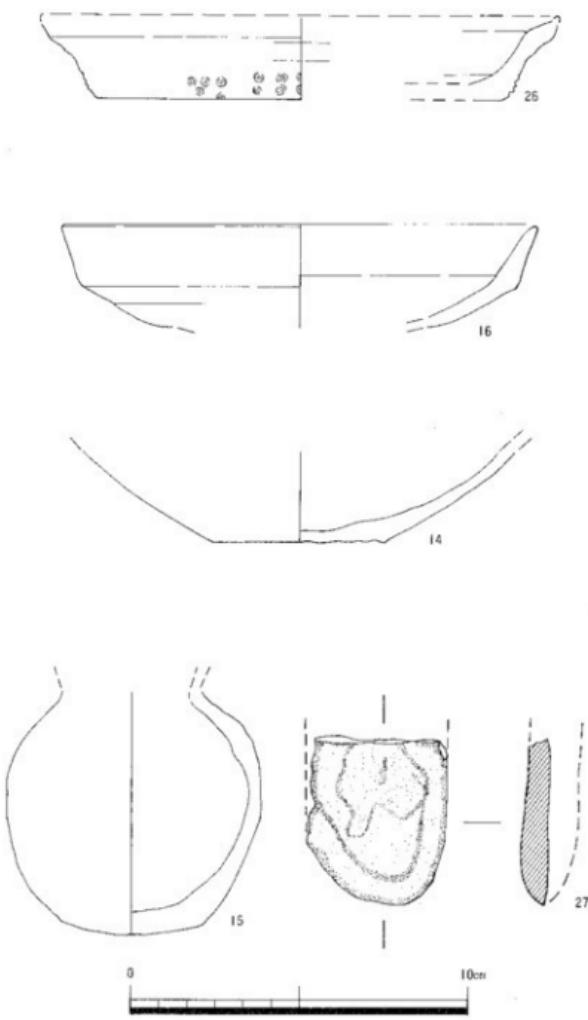
鏡面の存部分には5条の弱い線刻文がみられる。詳しい考察は次章に譲る。

その他、鉄鎌とみられる遺物を検出しているが、原形を留めぬほど損壊が激しく、実測写真撮影等も不可能な状態であった。ここではこのような遺物も混じって投棄されたことを記しておくだけにする。

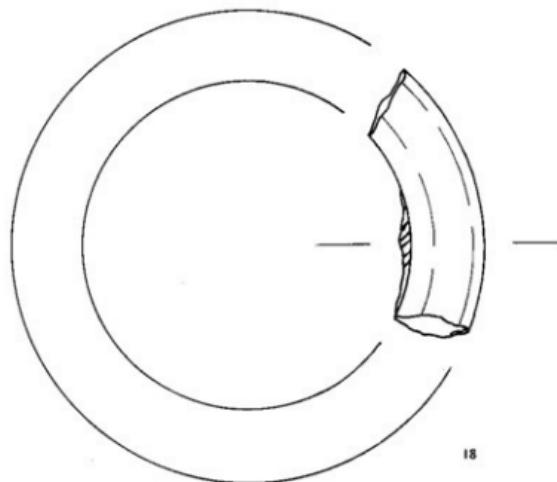
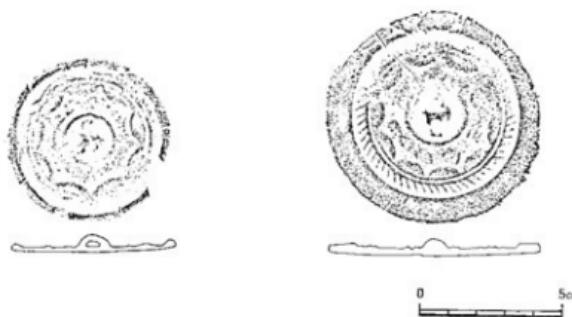
SK02土壤 出土遺物（第20図）

土師器

19. 小型丸底壺・底部欠損。口径不明。砂粒が突出するほど磨滅が激しく調整は、ユビナデ以外観察不能である。体部最下部からほぼ直立してのびた後、落差をもって弱く外反しながら端部を丸くおさめる。祭祀に使用されたものであろうか。庄内併行期。
20. 器台・脚部のみ残存。裾部最上部からカーブを描いてのび、端部を丸くおさめる。祭祀に使用されたものであろうか。庄内併行期のものと考えられる。
21. 器台・ほぼ完形で出土。体部外面にヘラミガキが施されている以外は磨滅が激しく観察できない。安定した脚部と裾部をもち、椀形の受盤がしっかりと乗っている。これも祭祀に使用されたものと思われる。庄内併行期のものであろう。
22. 裹・底部のみ残存。丸く突出した底部から外方へのびる形態は、原口正三氏が過去に上田町遺跡で調査された第II層出土の土器に酷似するところから、庄内併行期・上田町II式に属するものとみられる。



第18図 出土遺物実測図 3



第19図 出土遺物実測図 4 一高倉洋郎氏編年による小形内行花文仿鏡資料
上左：I b (長崎県佐保浦赤崎遺跡出土)
上右：II a (福岡県飯氏馬場遺跡出土)
『三世紀の考古学』学生社 1981より転載・加筆

SD01溝状遺構 出土遺物（第18・20図）

土師器

23. 壺・底部欠損。体部外面に右上がりのタタキを施す。体部最下部から内傾しながらまっすぐのぼし、さらに変換点から外方へのびて端部を丸くおさめているが、やや鋭さがみられる。

口縁の傾きは“く”字状で、今回の調査で検出した遺物中他のものと共通しない独特の形態である。全体の形は、長胴形に近いと思われる。庄内併行期のものとみられる。

24. 器台・受部の大部分欠損。受部内面には粗雑な指頭圧痕が残る。脚部は受部からゆるやかな円弧を描き、変化点で弱く外反して端部を丸くおさめる。庄内併行期とみられる。

25. 器台・受部欠損。台形状のしっかりしたつくりであり、二方向に孔を穿っている。これも祭祀に使用されたのではないかと考えられる。庄内併行期のものとみられる。

26. 高壇・受部のみ残存。受部下部から外側へのび、落差をもった後に端部を丸くおさめる形態のようである。体部外面には、直径4mmの円形竹管文が6個単位で施されているが磨滅が激しく、細部の調整は不明である。祭祀に使用されたものか。

石製品（第18図）

27. 先端の一部残存。蛤刃の磨製石斧と思われる。大半を欠いているので時期は確定できないが、縄文晩期から弥生前期に同形態のものがある。砂岩製。

SP01ピット 出土遺物（第21図）

土師器・壺

28・29はハケによる調整がほどこされた壺の口縁である。28のハケメは5mm間に5本の単位である。口縁は28・29ともゆっくりと外方へのび、朝顔型に大きく開く。どちらも器肉が厚く、粗雑なつくりであるが、29の口縁外面には指頭圧痕がみられ、体部外面にはタタキの痕跡がみられる。

30・31は体部外面に右上がりのタタキが施され、タタキの単位は30が5本、31が6本である。口縁は30が外方へゆっくりとのび、先端部を丸くおさめているのに対し、31の先端部は直上にのびたのちまるくおさめている。30は欠損して不明だが、31の胴部は張り出して全体的には球形になると考えられる。

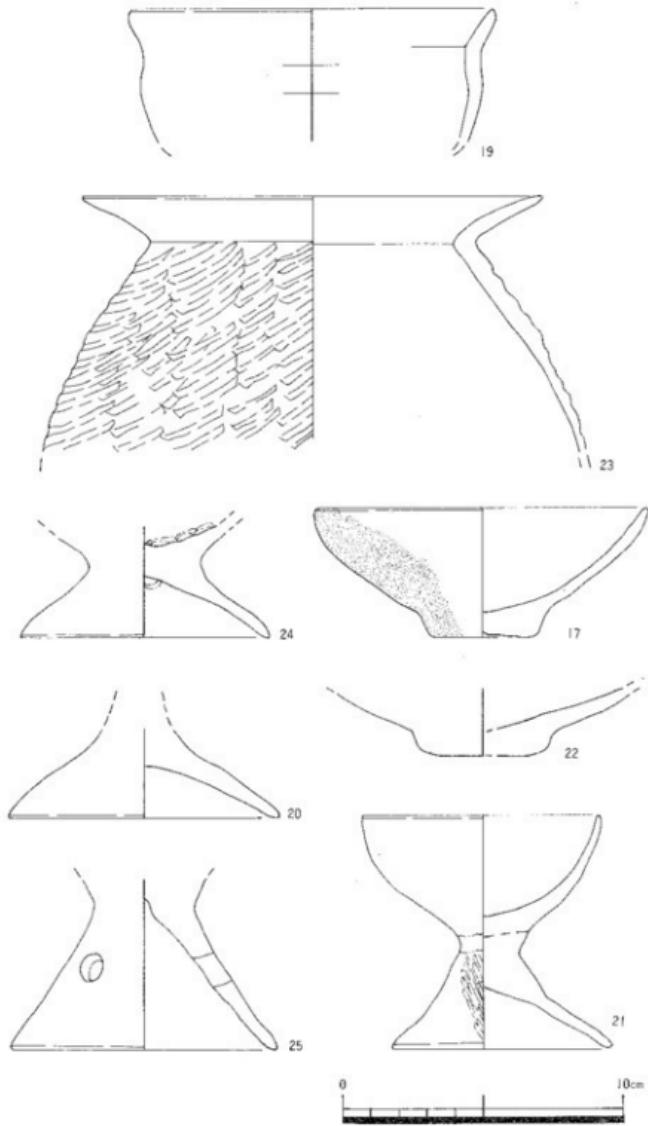
32はタタキが施された底部のみが残存していた。タタキは右上がりの方向で施されている。タタキの単位は5本で、内面にはヘラ状工具によるケズリの痕跡がみられ、最下面には粗雑な指頭圧痕が残る。ピットの最下面で検出したもので、磨滅が激しく、脆弱である。

自然河川 III 出土遺物（第22図）

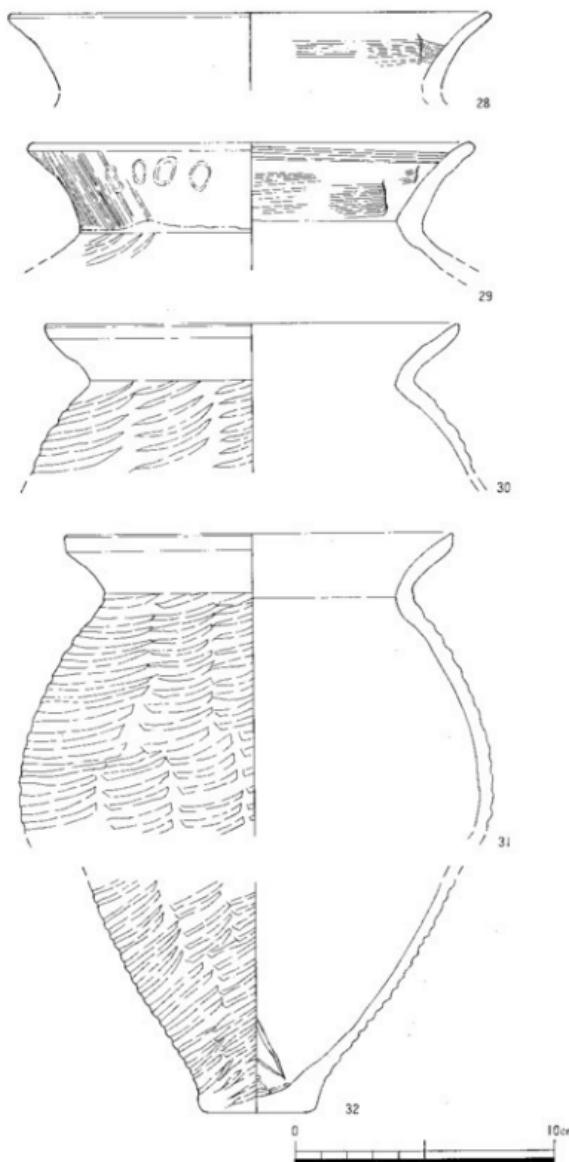
弥生土器

33. 把手・壺の体部に取り付けられていたものが剥がれ落ちたものとみられる。全体にユビナデを施し、弱い面取りを行っている。

34. 壺・底部のみ残存。全体にユビナデを施した後、体部外面に右上がりのタタキを行っ



第20図 出土遺物実測図 5



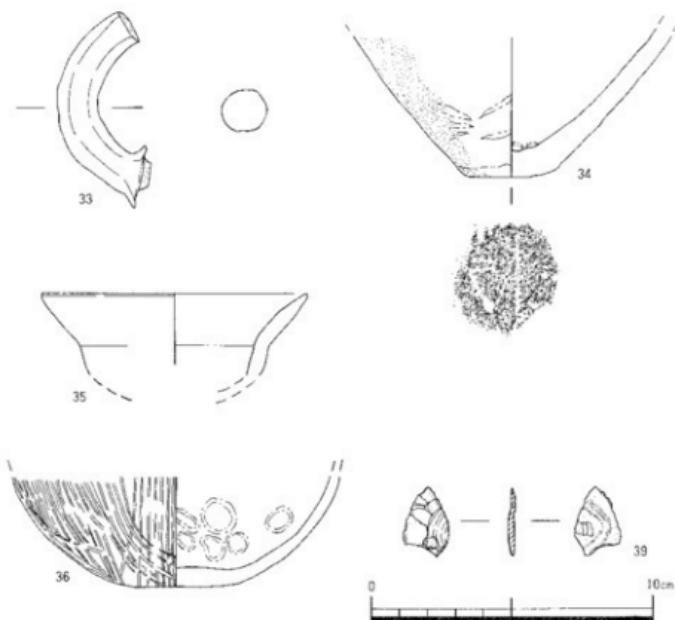
第21図 出土遺物実測図 6

ている。底部に木の葉痕がみられるところから、土器製作時に木の葉を敷いていたことがわかる。森岡秀人氏の「土器製作技法の研究」によれば、右ききの人が製作したことになる。弥生後期・畿内第V様式に属すると考えられる。

土師器

35. 小型丸底壺・底部欠失。残存している胴部の復原から小型丸底壺とした。庄内併行期のものであろう。

36. 鼓・底部のみ残存。全体にユビナデを施した後、体部外面にかけてハケ調整を行う。ハケメは1.7cmの間に8本単位で確認できた。底部内面には粗雑な大小の指頭圧痕がみられる。庄内併行期のものであろう。



第22図 出土遺物実測図 7

その他の出土遺物

SE 01 戸状造構 出土遺物 (第22図-37)

土師器の微細片とともに砥石とみられる石製品が出土したが、その検討は後の機会に譲るとして、ここでは実測図と写真を掲載しておく。砂岩製。

第6層 出土遺物 (第22図-38)

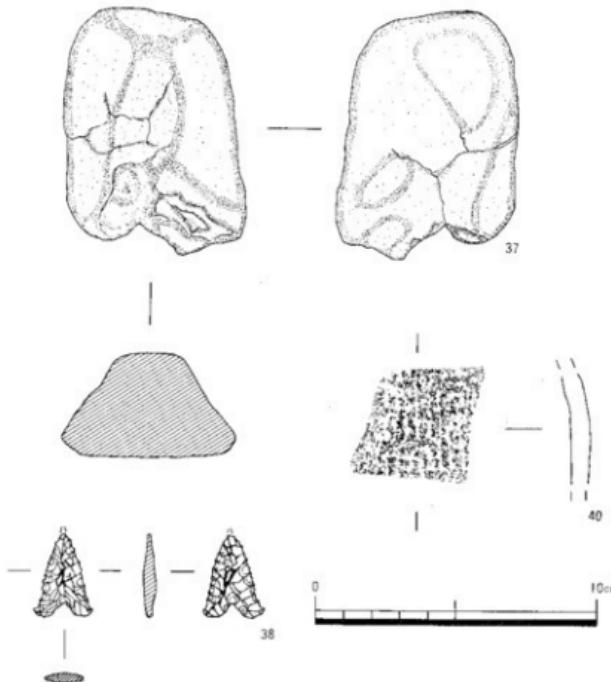
東西トレンチ崩壊処理の時点でG12区北壁第6層中から石鏡1点を得たが、その他の遺物は皆無であった。

石鏡はサスカイト製。残存長2.9cm・厚さ0.4cm、全体に細かな調整がなされ、基部両側にカエリを有する。類例は寡聞にして知らないが、このカエリによって装着がしっかりする点と、より一層殺傷力が強くなったと考えられる。その形態から、縄文前期のものと考えている。

“足跡群” 出土遺物

第4層〔オリーブ褐色(Hue 2.5Y 4/4)粘質土〕検出の“足跡群”を発掘する過程で、埋土中に黒色土器・瓦器・土師器の細片が含まれることを確認したが、固化できるものは無く、ただ1点だけG3区内のヒトの足跡から「神功開寶」が出土している。

神功開寶は皇朝十二銭の第3番目にあたり、初鑄年代は大平神護1(765)年で、延暦15(796)まで鋳造・発行されていたといふから伝世品としても、長い年月土中に埋没していくことになる。腐食による穴があいている。



第23図 出土遺物実測図 8

出土遺物観察表

この観察表は、第5層および各遺構から出土したもの、本文の記述に従ってまとめたものである。種類別に分類すべきであろうという意見もあったが、便宜上の処置であることを御了解願いたい。なお、表の番号は、挿図番号—実測図番号である。

(1) 第5層(遺物包含層)

| 番号 | 種類 | 器種 | 法量回 | 色調 | 胎土 | 焼成 | 出土地点 | 所見 |
|------|-----|------------|---------------------|------------------------------|--------------------------|----------|-------------------|---|
| 16-1 | 土師器 | 甕 | 口径: 18.8 残高: 4.4 | (内面) 薄茶灰色 (外面) 明茶黄色 | 石英・ 長石の 粗~細 粒子含 | 軟 | D-2区 | 全体にユ ビナデ。 磨滅が激 しい。 |
| 16-2 | 土師器 | 甕 | 口径: 12.4 残高: 8.8 | 内外面と も黄橙色 | 石英・ 長石の 粗~細 粒子含 | 軟 | I-10区 | 同。体部 外面にタ タキ。 庄内併行 期(?) |
| 16-3 | 土師器 | 婧 瓶 | 残長: 3.5 | 内外面と も黄橙色 | 石英・ 長石の 細粒子 を含む | 軟 | F-11区 | 穿孔あり 弥生後期 ~古墳時 代初頭? |
| 16-4 | 土師器 | 瓶 | 底径: 4.0 残高: 4.3 | 内外面と も黄橙色 | 石英・ 長石の 細粒子 を含む | 軟 | | ユビナデ 体部外面 タタキ。 底部に穿 孔。 弥生後期 以降。 |
| 16-5 | 石製品 | 叩き石 (?) | 長さ: 8.7 周囲: 10.4 | 暗灰色 | 材質: 砂岩 | G-11区 | | 時期不明 |
| 17-6 | 須恵器 | 坏 身 | 口径: 15.0 残高: 3.5 | (内外面 とも) 灰白色 | 石英・ 長石の 細粒子 を含む | 堅緻 良好 | G-10区 | 回転ナデ 回転ヘラ ケズリ。 発釉。 6世紀中 頃か。 |
| 17-7 | 須恵器 | 坏 盖 | 口径: 8.4 器高: 4.3 | (内外面 とも) 青白色 | 長石の 細粒子 を含む | 堅緻 良好 | J-1区 トレンチ 内 | 回転ナデ 回転ヘラ ケズリ。 6世紀中 頃か。 |
| 17-8 | 須恵器 | 坏 身 | 口径: 13.4 残高: 3.5 | (内外面とも) 青白色 | 長石の細 粒子を含む | 堅緻 良好 | G-4区 | 回転ナデ 8世紀頃 |

| 番号 | 種類 | 器種 | 法量(kg) | 色調 | 胎土 | 焼成 | 出土地点 | 所見 |
|-------|-----|-----------|------------------------------|-----------------------------|--------------------------|----------|-------------------------------|--|
| 17-9 | 須恵器 | 古付壺 | 底径：16.8 残高：5.0 | (内外面とも) 灰白色 | 長石の 細粒子を含む | やや 良好 | G-10区 | 回転ナデ 内面に青 海波文。 7世紀頃 のものか |
| 17-10 | 土師器 | 壺 | 口径：20.2 底径：14.8 器高：2.5 | (内外面とも) 暗茶褐色 | 長石の 細粒子を含む | 軟 | G-5区 | 大型化し たもの。 10世紀頃 のものか |
| 17-11 | 青磁碗 | 青磁 小皿 | 残高：1.9 | 釉：明綠 色 無釉部分 黄白色 | 目立つ た粒子 含まず | 堅緻 良好 | D-5区 | 内面に“大” 字状刻花 文。 14世紀・ 明代のもの か。 |
| 17-13 | 磁器 | 羽釜 | 底径：6.0 残高：4.6 | 釉：明綠 色 無釉部分 黄白色 | 目立つ た粒子 含まず | 堅緻 良好 | J-1ライン 町撤去時 (地区未 確認) | 15世紀頃 のものか |
| 17-23 | 瓦器 | 羽釜 | 口径：18.4 残高：4.6 | (内面) 暗灰色 (外側) 灰茶褐色 | 石英・ 長石の 細粒子 を含む | 軟 | J-1区 トレンチ 内 | 回転ナデ を施す。 磨滅が激 しい。 15世紀中 頃か。 |
| 23-40 | 土師器 | 牌式系 土器 | 残存最大幅 ：4.0 | 茶褐色 (内外面) | 石英・ 長石の 細粒子 を含む | 軟 | J-9区 排水溝内 | 耕土中で 検出。 |

(2) SK01土壤

| 番号 | 種類 | 器種 | 法量(kg) | 色調 | 胎土 | 焼成 | 出土地点 | 所見 |
|-------|-----|-----------|------------------|--------------------|--------------------------------|----|-------|-------------------------------------|
| 18-14 | 土師器 | 壺 | 底径：6.0 残高：3.2 | (内外面 とも) 青白色 | 石英・ 長石の 粗～細 粒子を 含む | 軟 | F-10区 | 全体にユ ビナデを 施す。 庄内併行 期(?) |
| 18-15 | 土師器 | 小型 丸底壺 | 残高：8.6 | (内外面 とも) 黄白色 | 石英・ 長石の 粗～細 粒子を 含む | 軟 | G-10区 | 全体にユ ビナデを 施す。 庄内併行 期(?) |

| 番号 | 種類 | 器種 | 法量(kg) | 色調 | 胎土 | 焼成 | 出土地点 | 所見 |
|----------|-----|-----------|--|-----------------------------|--------------------------------|----|-------|--|
| 18-16 | 土師器 | 高 壕 | 口径: 17.0 残高: 3.2 | (内外面 とも) 明橙色 | 石英の 長石の 粗~細 粒子を 含む | | G-10区 | 全体にユ ビナデ。 庄内併行 期(?) |
| 20-17 | 土師器 | 鉢 | 口径: 11.6 底径: 3.6 器高: 4.6 | (内外面 とも) 黄白色 | 石英・ 長石の 粗~細 粒子を 含む | 軟 | G-10区 | 全体にユ ビナデ。 体部外面 に煤付着 庄内併行 期(?) |
| 19-18 | 金属器 | 小形 彷彿鏡 | 残存部分 4.7 周縁厚 0.45 復原径 8.4 | エメラル ド・グリ ーン (青銅色) | 材質: 青銅 | | F-10区 | 弥生後期 前半(?) ガマサビ 噴出。 |
| 記載 のみ | 金属器 | 鉄 鏡 | 原形を留め ない | 暗茶褐色 (錆色) | 材質: 鉄 | | F-10区 | 腐食激し く、計測 撮影不能 |

(3) SK02土壤

| 番号 | 種類 | 器種 | 法量(kg) | 色調 | 胎土 | 焼成 | 出土地点 | 所見 |
|-------|-----|-----------|-------------------------------|---------------------|--------------------------------|----|------|---|
| 20-19 | 土師器 | 小型 丸底壺 | 残高: 4.8 | (内外面 とも) 黄白色 | 長石・ 石英の 粗~細 粒子を 含む | 軟 | C-9区 | 全体にユ ビナデを 施す。 磨滅が激 しい。 庄内併行 期(?) |
| 20-20 | 土師器 | 器 台 | 底径: 9.6 残高: 3.2 | (内外面 とも) 黄白色 | 長石・ 石英の 細粒子 を含む | 軟 | C-9区 | " |
| 20-21 | 土師器 | 器 台 | 口径: 8.5 底径: 9.1 器高: 8.7 | (内外面 とも) 明黄白色 | 長石・ 石英の 細粒子 を含む | 軟 | C-9区 | 全体にユ ビナデ。 体部外面 にヘラミ ガキ。 庄内併行 期(?) |

| 番号 | 種類 | 器種 | 法量 (m) | 色調 | 胎土 | 焼成 | 出土地点 | 所見 |
|-------|-----|----|------------------|----------------------------|--------------------------|----|------|---|
| 20-22 | 土師器 | 甕 | 底径：4.6 残高：2.4 | (内面) 黄白色 (外面) 黒褐色 | 石英・ 長石の 細粒子 を含む | 軟 | C-9区 | 全体にユ ビナデ。 磨滅が激 しい。 庄内併行 期(?) |

(4) SD01溝状遺構

| 番号 | 種類 | 器種 | 法量 (m) | 色調 | 胎土 | 焼成 | 出土地点 | 所見 |
|-------|-----|----------|--------------------|--------------------|---------------------------------|----|-------|--|
| 20-23 | 土師器 | 甕 | 口径：16.4 残高：9.3 | (内外面 とも) 明橙色 | 石英・ 長石の 細粒子 を含む | 軟 | G-10区 | 全体にユ ビナデ。 体部外面 にタタキ を施す。 庄内併行 期(?) |
| 20-24 | 土師器 | 器台 | 底径：8.8 残高：4.4 | (内外面 とも) 明橙色 | 石英・ 長石の 粗～細 粒子を 含む。 | 軟 | G-10区 | 全体にユ ビナデ。 内面に指 頭圧痕。 庄内併行 期(?) |
| 20-25 | 土師器 | 器台 | 底径：9.4 残高：6.1 | (内外面 とも) 茶灰色 | 石英・ 長石の 粗～細 粒子を 含む。 | 軟 | H-10区 | 全体にユ ビナデ。 三方向に 穿孔。 庄内併行 期(?) |
| 18-26 | 土師器 | 高坏 | 残高：2.7 | (内外面 とも) 黄白色 | 石英・ 長石の 細粒子 を含む | 軟 | H-10区 | 全体にユ ビナデ。 体部外面 に竹管文 を施す。 庄内併行 期(?) |
| 18-27 | 石製品 | 始石 刃斧 | 残存長 6.9 先端幅 4.7 | 暗灰色 | 材質：砂岩 | | G-10区 | 時期不明 だが、同 形態のも のが縄文 前期にあ る。 |

(5) SP01ピット

| 番号 | 種類 | 器種 | 法量 [kg] | 色調 | 胎土 | 焼成 | 出土地点 | 所見 |
|-------|-----|----|----------------------|-----------------------------|--------------------------|----|------|---|
| 21-28 | 土師器 | 甕 | 口径: 18.4 残高: 3.0 | (内外面 とも) 黄橙色 | 石英・ 長石の 細粒子 を含む | 軟 | C-4区 | 全体にナ デ。内面 にハケメ を施す。 庄内併行 期(?) |
| 21-29 | 土師器 | 甕 | 口径: 16.8 残高: 4.9 | (内外面 とも) 黄白色 | 石英・ 長石の 細粒子 を含む | 軟 | C-4区 | 全体にナ デ。内外 面にハケ メを施す。 体部外面 にタタキ が入る。 庄内併行 期(?) |
| 21-30 | 土師器 | 甕 | 口径: 16.0 残高: 5.9 | (内外面 とも) 黄橙色 | # | 軟 | C-4区 | # |
| 21-31 | 土師器 | 甕 | 口径: 14.6 残高: 11.5 | # | # | 軟 | C-4区 | # |
| 21-32 | 土師器 | 甕 | 底径: 4.4 残高: 8.9 | (内面) 黒灰色 (外側) 明茶灰色 | 石英・ 長石の 細粒子 を含む | 軟 | C-4区 | 全体にナ デ。体部 外面にタ タキを施 す。底部 内面にヘ ラ状工具 によるケ ズリ痕が みられる。 庄内併行 期(?) |

(6) 自然河川 III

| 番号 | 種類 | 器種 | 法量 [kg] | 色調 | 胎土 | 焼成 | 出土地点 | 所見 |
|-------|----------|----|---------|-----|-------------------------|----|------|--------------------------------------|
| 22-33 | 弥生 土器 | 把子 | 残長: 6.9 | 黄灰色 | 長石の 粗~細 粒子を 含む | 軟 | J-1区 | 全体にユ ビナデ。 繩文晚期 ~弥生前 期(?) |

| 番号 | 種類 | 器種 | 法量回 | 色調 | 胎土 | 焼成 | 出土地点 | 所見 |
|-------|------|-----------|------------------|----------------|-------------------|----|------|--|
| 22-34 | 弥生土器 | 甕 | 底径：3.0 残高：5.0 | (内外面とも) 茶褐色 | 長石の 細粒子 を含む | 軟 | J-1区 | 全体にユ ビナデ。体部外 面にタタキ を施す。 底部に “木の葉” 痕あり。 巣内第Ⅷ 様式。 |
| 22-35 | 土師器 | 小型 丸底甕 | 口径：9.4 残高：2.9 | (内外面とも) 茶灰色 | 長石の 細粒子 を含む | 軟 | J-1区 | 全体にユ ビナデ。 庄内併行 期(?) |
| 22-36 | 土師器 | 甕 | 底径：3.0 残高：3.9 | (内外面とも) 黄褐色 | 長石の 細粒子 を含む | 軟 | J-1区 | 全体にユ ビナデ。体部外 面にハケメ 調整を施す。 内面 に指頭圧 痕あり。 庄内併行 期(?) |



第24図 『神功開寶』拓影 (実大)

第5章 考 察

1. 出土遺構について

近年、各地で各時代の水田遺構が出土し、その発掘成果をおさめた報告書も多数刊行されている。こうした考古学・歴史学界の関心の高まりに呼応して全国の水田遺構集成が奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センターから発行された。

考古学は、専門技術だけでなく、植物学・生物学など他の専門分野の協力と知識を必要とする時代になってきたのである。

中世の水田跡に伴う足跡は、松原市に隣接する岸市の日置荘遺跡から出土したことが新聞に報じられた。松原市内では天美で古代の足跡を検出したとの教示を得たが、未報告という理由で資料の提供を拒否された。そこで、この項では本遺跡と同じ中世の水田跡が発掘された兵庫県芦屋市に所在する2つの遺跡の現地説明会資料をもとに比較・検討を試みたい。

芦屋市久保遺跡では中世（南北朝時代）の水田跡から、東西方向の運動性を持つヒト・動物（ウシ）の足跡が検出され、同時に“田おこし”を行ったとみられるカラスキ（唐鶴）痕も検出されている。

検出された足跡の数量は上田町遺跡に比べて少ないが、大人の右足が指先まで鮮明に残るものがある。また、ウシの前足の間隔は40～45cmで、歩幅は15～20cmである。この観察結果から、やや鈍い動きであったことが想像される。粘質の強い水田での急激な動きは必要なく、作業の性格からもスローテンポであったことは、機械化されるまでの水田耕作を知るものなら理解できるだろう。

上田町遺跡で検出したウシの前足の間隔は、無秩序に重複した足跡によって確認することはできなかったが、歩幅は17～20cmであり、久保遺跡のものとはほとんど変わらないようである。

久保遺跡のカラスキ痕=耕作痕の長さは一単位0.8～1.1m程度であり、連続的に、この運動幅で“田おこし”を行っていたことが窺える。これは牛に負担をかけぬ配慮であるとともに、水を多く含み、粘性が強く重い土に対して、1m以上の単位ではスマーズに搔き取ることができないからである。上田町遺跡でもこうした配慮がなされていたと考えられるが、前章で述べたとおり、一定した運動性を確認できるだけのカラスキ痕を検出することはできなかった。

同じ芦屋市打出小堀遺跡からも中世（鎌倉～室町時代）の水田跡が出土している。これは、東西方向の運動性を持つヒト・動物（ウシ）の足跡が検出されている。ここでも緩いカーブを描きながら反転するウシの足跡の運動がみられ、一定の間隔を持って平行に並び、東西方向に走るカラスキ痕の運動単位はどうだろう。現地説明会資料の遺構図を見る限り

1.1~9.0m以上の溝状のものが描かれている。調査者の判断にもよるが、一見この巨大な単位も、実際は1.1~1.3mの単位が正しいように思える。それは東西方向の溝の中に急に狭まったのち、3~5cm程度の間隔をおいて拡がる個所がいくつもみられるからである。これがカラスキ痕の一単位であり、終点と、新たな開始点となると考えるのである。

両遺跡とも報告書が未刊であるため、現地説明会資料だけによる考察となつたが、今後は足跡とともに、カラスキ痕の運動単位をも検討していく必要があるだろう。

上田町遺跡を含め、3遺跡では明確な咲畔が検出されなかつたため水田の一区画の面積を確定することはできないが、東西方向の足跡・カラスキ痕からみて、東西に長い水田の存在を推定することは可能である。

「田おこし」は、ウシだけでなく、人力によっても行われる。それは筆者がある水田の作業を偶然の機会に見たものだが、大型のスコップで踏み込み、耕土・床上を掘り起こしていた。その水田も水を多く含み、強い粘質土であった。場所によっては水が噴き出していた。掘り起こした跡には、減り込んだ足跡がくつきりと残っていた。カラスキ痕を検出できなかつた場合、狭い水田ではこうした作業も行われていることを考慮すべきだろう。

最後に上田町遺跡の中世水田の埋没時期について考えてみたい。足跡・カラスキ痕の流入土は、第3層の耕土そのものであり、第3面は調査区全域で平均した水平堆積であることを確認しているので、河川の氾濫による埋没でないことは確かである。それは足跡群の埋土中に全く砂・砂礫がみられなかったことで証明される。さらに上層の耕土・床土層も全くの水平堆積である。現時点で確認した資料によって以下のことを考えた。

- ① 中世初頭頃、棚田を有する水田経営が開始された。
- ② 土地が瘦せており、下層以下が砂混じりのシルト層・砂層であった為、何度も床土の張り替えが行われた。
- ③ 中世末から近世にかけて、水田経営の再編成が行われ、中世までの水田が埋められ段差のない一定した面での水田経営が開始された。

これらの点から、水田の埋没は自然の力によってではなく、近世の支配者による行政的な力によって、埋没したとは考えられないだろうか。

2. 出土遺物について

今回の調査でS K01から出土した小形彷彿鏡は、破碎面が鋭利でなく、裏面にはガマサビが噴き出している。縁の断面形状はなめらかな橢円形を呈し、これを高倉洋彰氏の形式分類に照合すると、第I型b類（畿内第IV様式）と第II型a類（畿内第V様式後半）の中間形態、つまり過渡期の小形彷彿鏡であることが考えられる。第I型b類は、いわゆるカマボコ縁であり、第II型a類は平縁であるが、今回出土したこの小形彷彌鏡はそのどちらにも属さない橢円形形状を呈するものであり（第19図）、おそらく畿内第V様式前半、すなわち弥生時代後期前半のものと考えられる。しかし、今回の調査では、この時期に相当する土器は検出されず、遺構自体もこの時期のものではない、考えられることは、ある一定

の時期まで、つまり庄内併行期（古墳時代初頭）頃まで保管された後に投棄されたものと思われる。この遺物に相当する時期の遺構が、上川町遺跡あるいはその周辺遺跡で検出される時が来るかも知れない。

注) この項を執筆するにあたり、芦原市教育委員会の森岡秀人氏の御教示を賜わった。文中、高倉洋彰氏の鏡の編年については、学生社刊『三世紀の考古学』「遺物・鏡」によった。

3. 丹比柴籬宮跡について

反正天皇は、いわゆる倭の五王の一人にあてられているが、「記・紀」による記述が少なく、宮を営んだ丹比柴籬宮も、「日本書紀」反正天皇冬六月の条に「河内の丹比に都つくる是を柴籬宮と謂す。」(岩波書店『日本古典文学大系67・日本書紀 上』より)とあり、「古事記」には「多治比之柴垣宮」と記されているが、その実態については全く不明といってよい。鎌倉時代に著された歴史書『帝王編年記』には「丹比柴籬宮（河内国丹比郡。今宮坂上路北宮地是也。）」と記されているものの、これも現在のどの場所を指しているのかはわからない。これが近世の地誌になると、「松原莊植(上)田村広庭神祠の東北」と記され、この頃すでに現在の柴籬神社が地として挙げられている。

伝承地としての柴籬神社は、近鉄河内松原駅の南にあり、「反正天皇柴籬宮址」の石碑が建てられて、地元ではこれが宮跡であると信じられている。「松原市史・第一巻」付図「松原市遺跡地図」には柴籬神社を中心に南北約1,200m、東西約1,100mの長方形の範囲で丹比柴籬宮跡が記載されている。昭和57年9月、新堂2丁目の新堂遺跡から木橋の遺構が出土し、地図上で、斜行する古道の存在が推定されたが、丹比柴籬宮跡推定範囲の数次の発掘調査が実施されているにもかかわらず、その存在を証明するものは何ひとつ検出されていないのである。

柴籬神社を伝承地とする根拠は、神社周辺に残る「柴籬・極田山・反正山」などの地名に由来するらしい（調査地の小字名は「砂」であり、北と西を逆L字形で「中門」であることを確認している。しかし、松原市発行の「松原における小字名と小字図」をみる限り、それを裏付ける証拠はなく、むしろこの図から整然とした条型地割が残る西北部分に対して、柴籬神社周辺の雑然とした区画が古い河川の氾濫を思わせるのである。このような条件の土地に宮を営んだとすれば、その条件に合った遺構を考えて調査すべきであろう。

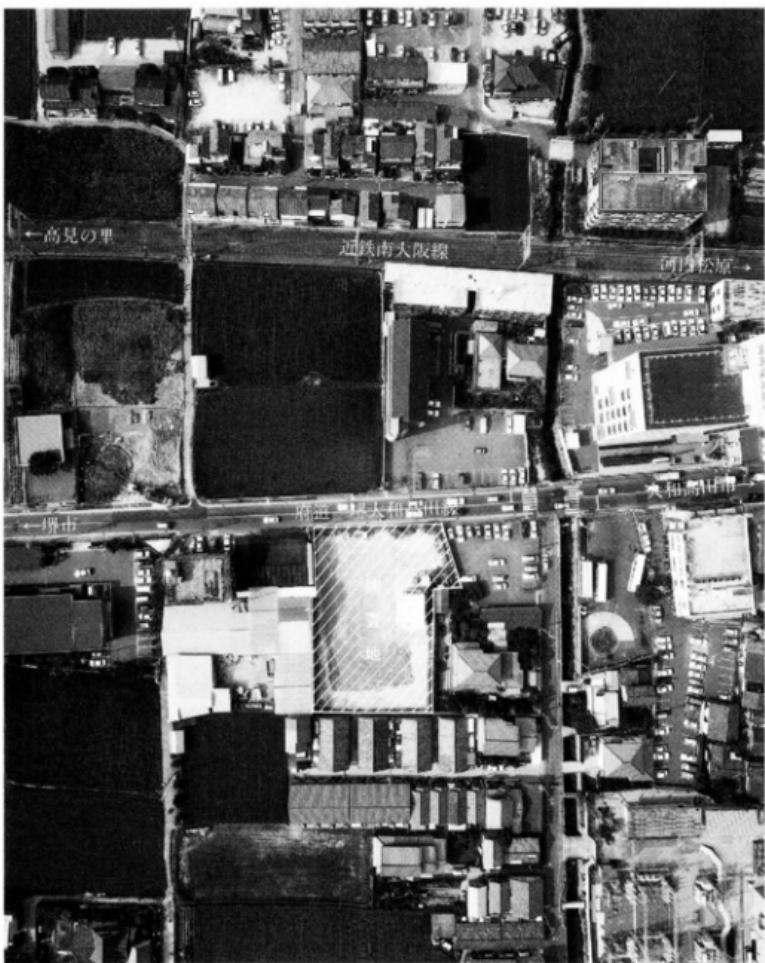
伝説に近い宮跡の確認は、仁徳天皇の高津宮、雄略天皇の朝倉宮などのほか、大和の地上に宮都が定着したものも含め、それを確定するには、まだ長い歳月を要しそうである。



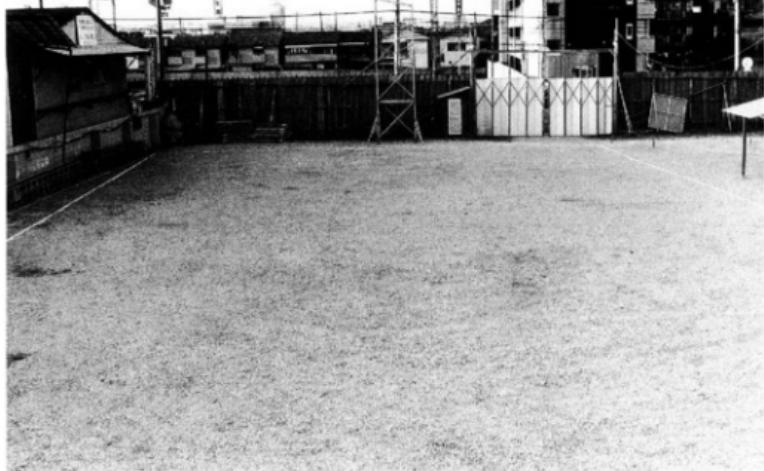
第25図 調査地周辺「字切り図」

(松原市史資料集 第4号付図「松原における大字及小字図」を縮小・加筆した)

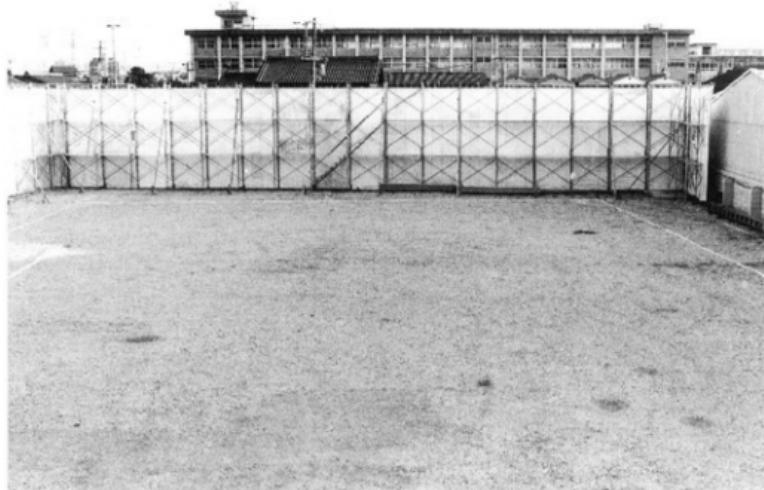
図 版



調査地周辺航空写真



調査着手前の状況（南から）



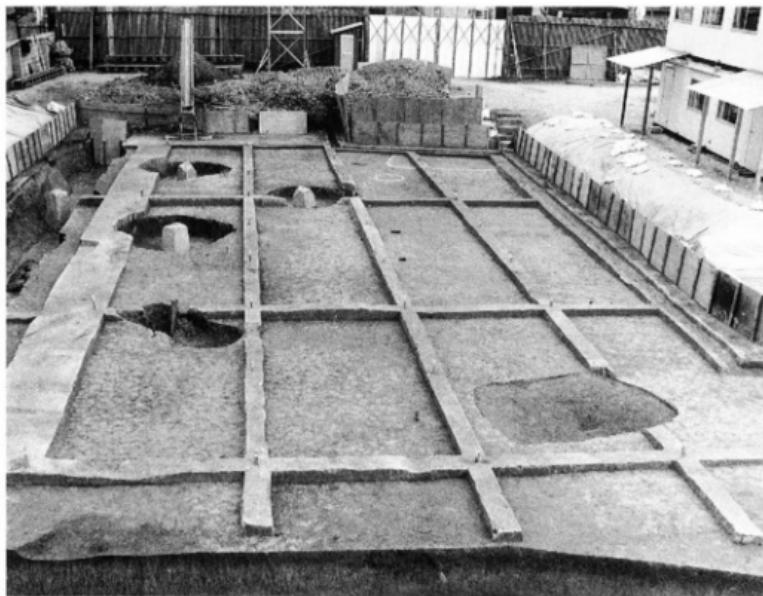
同（北から）



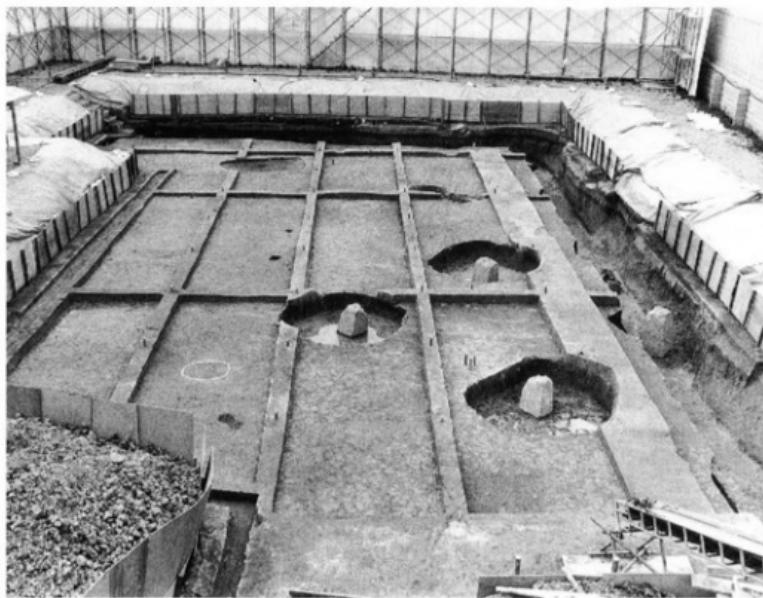
第3層（中・近世耕土層）面全景（南から）



同（北から）



第4層（中世床土＝“足跡群”検出面）面全景（南から）



同（北から）



“足跡群・カラスキ痕”検出状況 (E-8区)



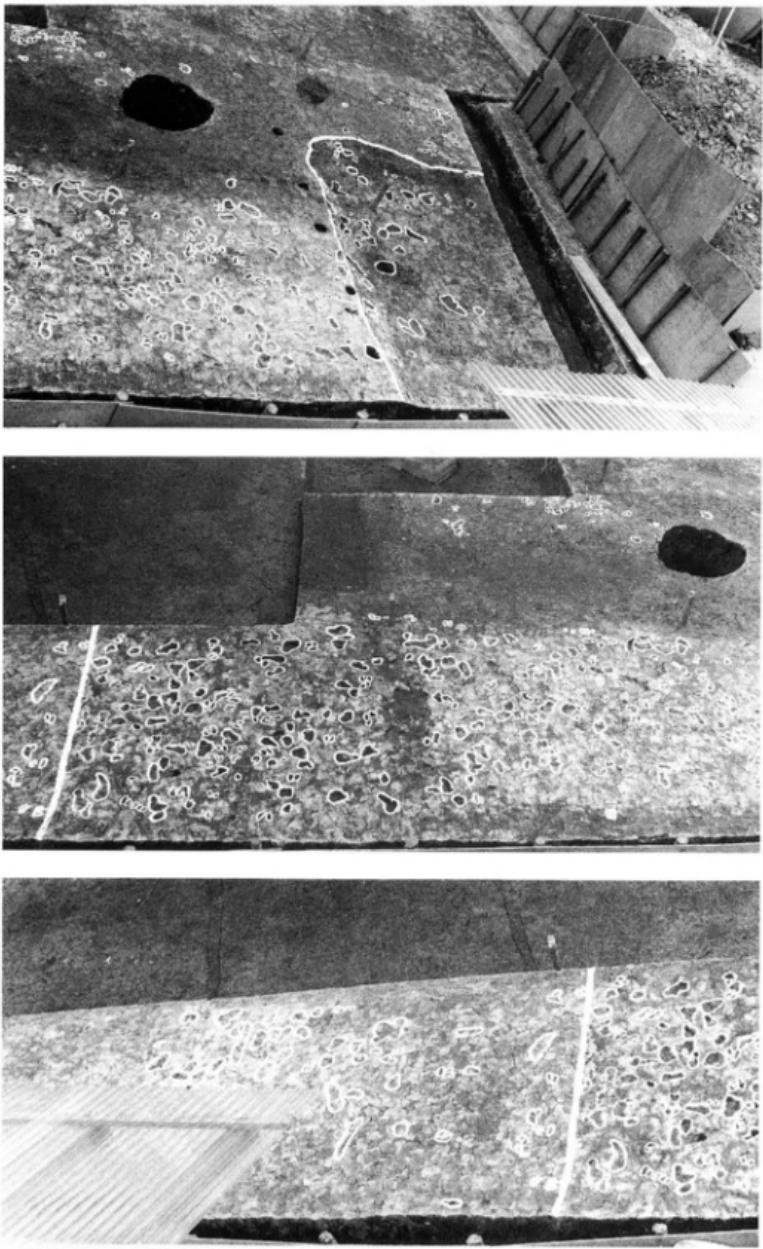
“足跡群(ウシ・ヒト)”検出状況 (G-5区)



“足跡群”完掘状況 (G-5区)



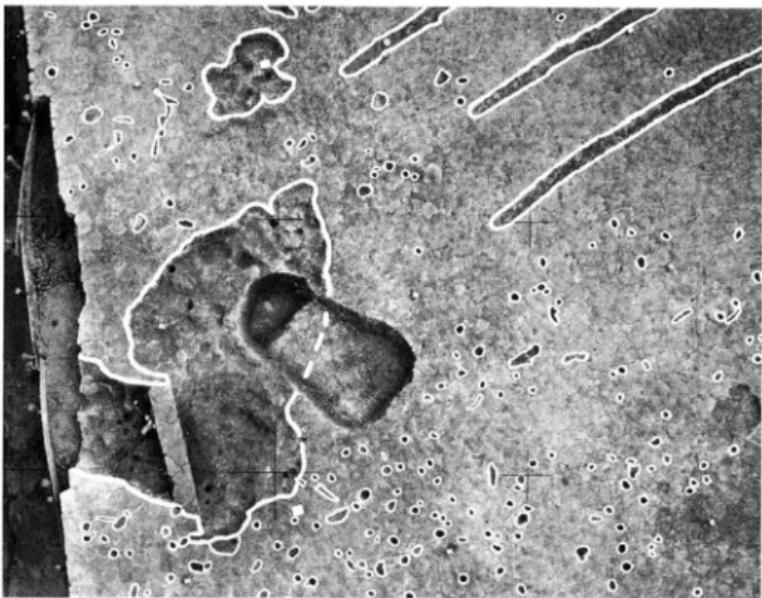
標準サンプルとした“ヒト”的足跡 (G-5区)



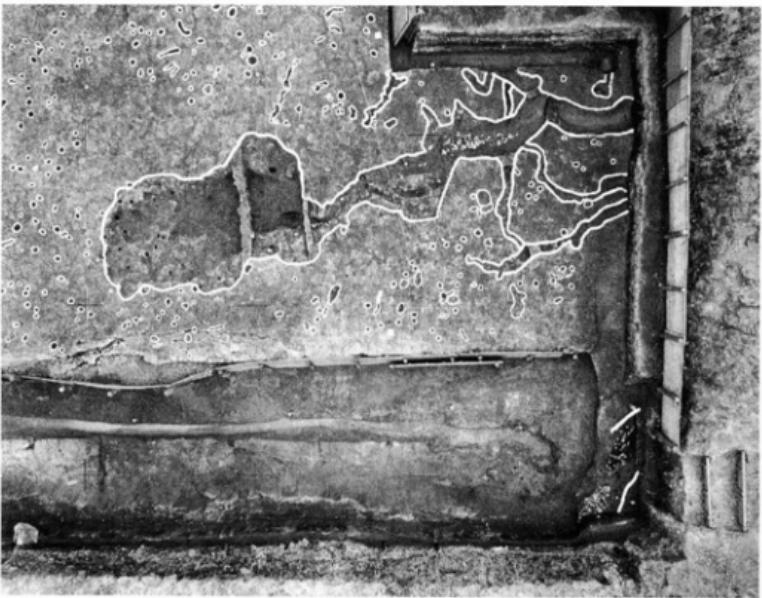
"足跡群"完掘状況 G-H間 (上:3-5区 中:5-7区 下:6-8区)



第 6 層面全景 (6月21日 写測エンジニアリング株式会社撮影)



SK02土壤全景（周囲の小穴群はカニ穴か？）



SK01土壤・SD01溝状遺構全景



SD 05溝状遺構全景（南から）



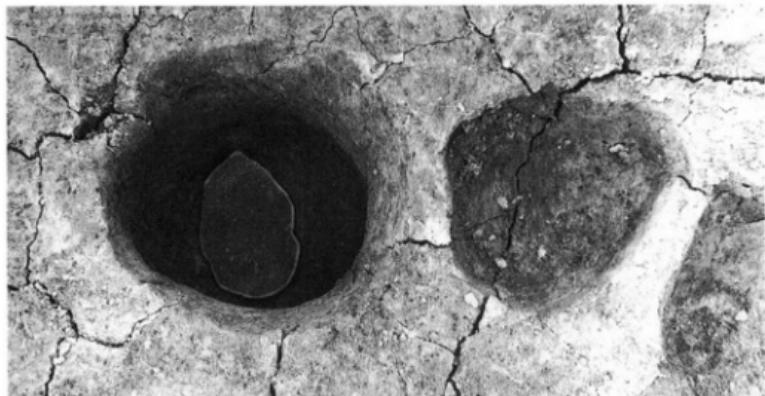
同（遺物出土状況）



SK01土壤遺物出土状況



排水トレンチ内遺物（遺物実測図番号 2）出土状況・I-10区

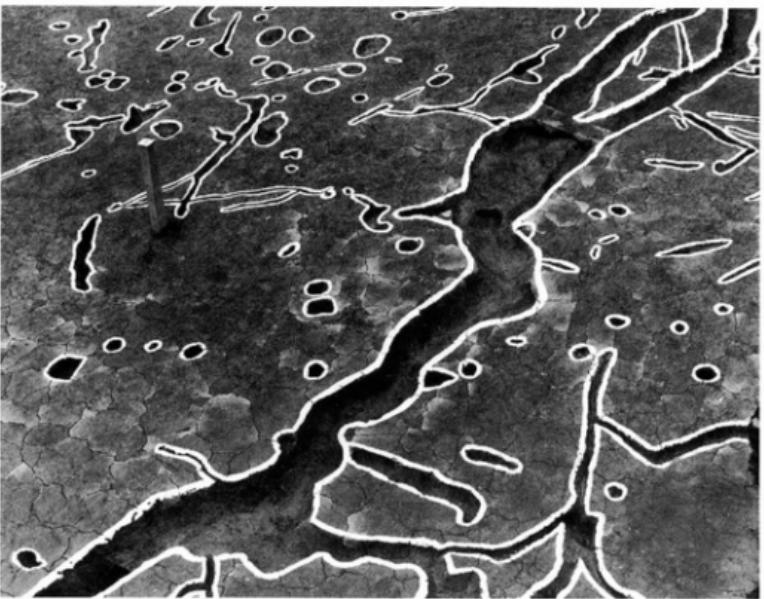


SP01ピット内遺物出土状況（遺物実測図番号28～32）

上：検出面 中：土師器壺遺存状況 下：ピット最深部分



6×6拡張区 SD10溝状遺構検出状況（東から）



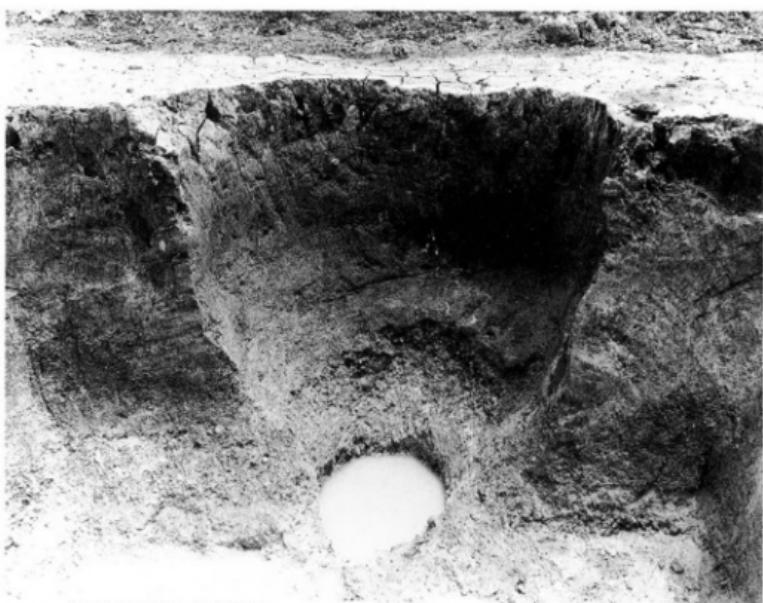
SD10溝状遺構完掘状況（東から）



6×6 拡張区深掘状況（西から）



6×6拡張区東壁面第13層遺物（弥生土器・植物遺体）出土状況



SE01井戸状遺構断ち割り状況



Fライン断ち割りトレンチ（北から）



17



32



2

(各遺物写真の横に付けた番号は、実測図番号に対応する=以下同じ=)

17. 鉢(土師器) 32. 壺(土師器) 2. 壺(土師器)

(縮尺約1/2)



25



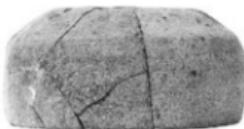
15



|



4



7



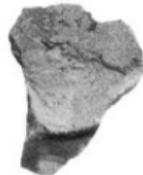
13



21



—

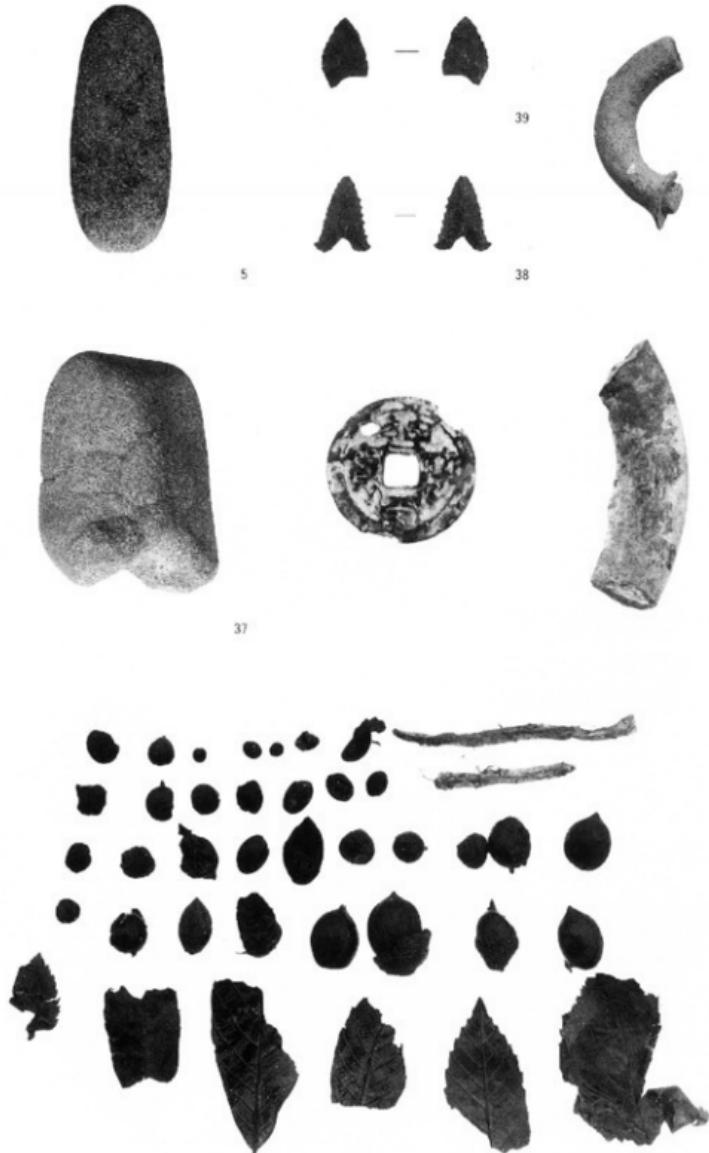


11

25. 器台(土師器) 4. 壺(土師器) 21. 器台(土師器) 15. 小型丸底壺(土師器)

7. 壺蓋(須惠器) 13. 羽釜(瓦器) 11. 青磁碗

(縮尺約1/2)



5. 叩き石(?) 37. 磨石(?) 39. 石鏡未製品(?) 38. 石鏡 33. 把手(弥生土器)
18. 小形仿製鏡 銭貨「神功開寶」 植物遺体(種子・木の葉)

(5.33.37.38.39. 鏡尺約1/2・その他は実大)

伝丹比柴籬宮跡 発掘調査報告書
上田町遺跡

平成3年3月25日 印刷

平成3年3月31日 発行

編集 伝丹比柴籬宮跡 発掘調査団
上田町遺跡

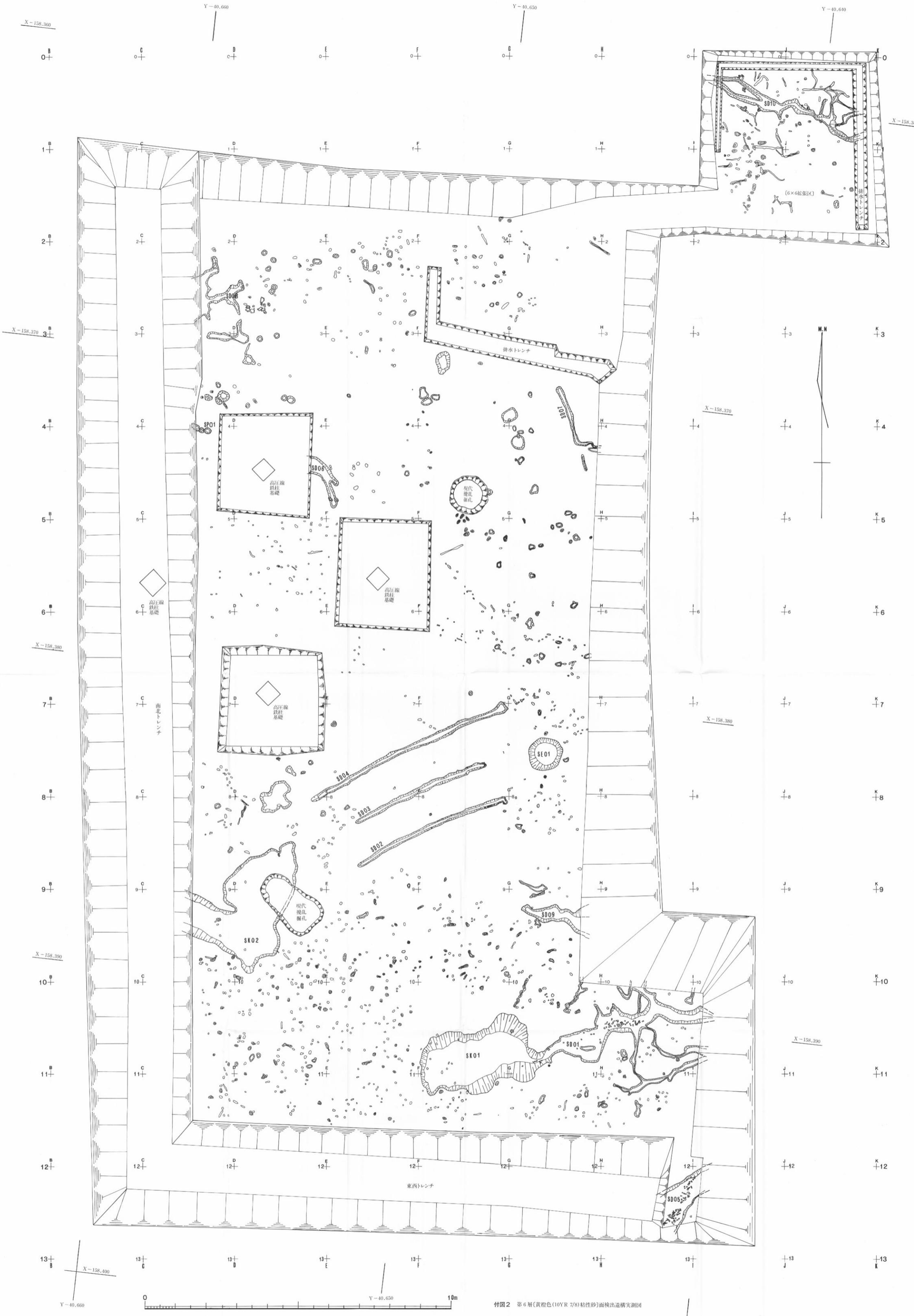
印刷 協 関西プロセス
京都市右京区山ノ内山ノ下町13番地

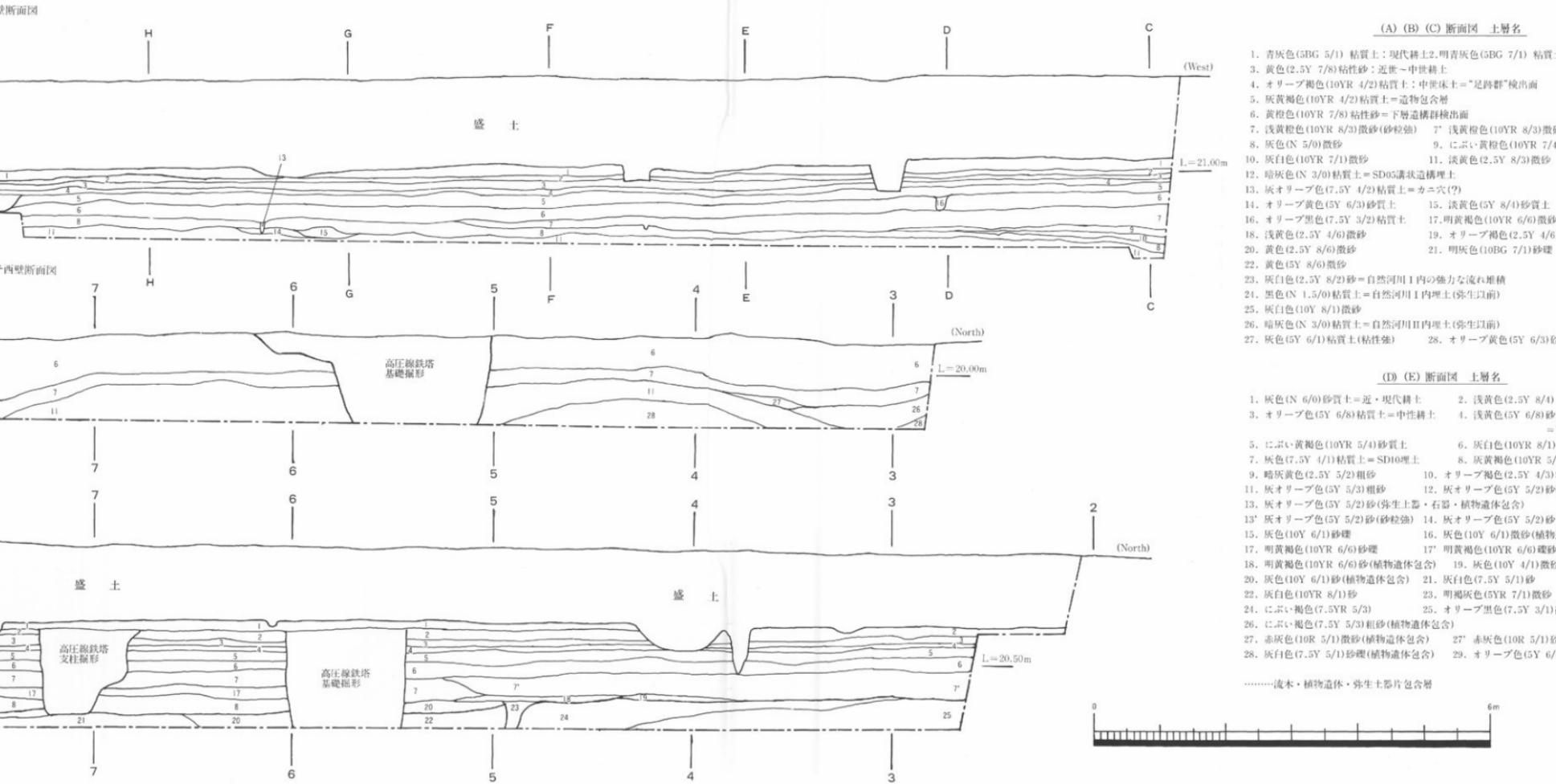
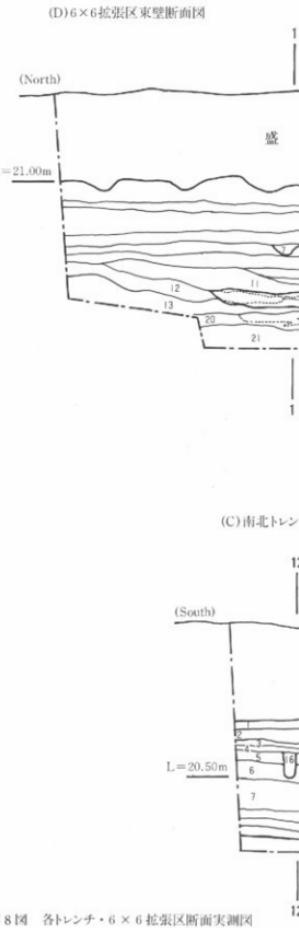


付図1 第4層(オリーブ褐色(10YR 4/2)粘質土=中世床土)面検出“足跡群”実測図(黒塗は運動方向を推定したもの)

* 神功開墾出土地点

■ “カラスキ痕”





第8図 各トレンチ・6×6拡張区断面実測図

